

令和7年度

「性別役割分担意識と進路選択や社会人の学びに関する調査」報告書

大阪市

大阪市立男女共同参画センター中央館

(クレオ大阪中央)

指定管理者:大阪市男女共同参画推進事業体

代表者:一般財団法人大阪男女いきいき財団

令和8年3月

目次

I. 調査概要	
1. 背景	1
2. 調査目的	1
3. 調査項目	2
4. 調査方法	3
5. 調査期間	3
6. 調査対象・サンプル	3
7. 報告書内で使用する用語、定義	4
8. 集計結果について	4
II. 調査結果	
1. 基本属性	5
2. 固定的な性別役割分担意識について	8
3. これまで自分を取り巻いてきた環境や経験、進路について	19
4. 社会人の学習活動について	36
III. 考察	52
IV. まとめ	55

I 調査概要

1. 背景

日本のジェンダー・ギャップ指数（GGI）は令和6（2024）年に引き続き、令和7（2025）年も118位であった。GGIは政治、経済、教育、健康の4ジャンルのジェンダー・ギャップの総合指数である。日本の教育はGGIの指数としては高いものの、経済指標における「専門・技術職の男女比」は女性の比率が低く、理工系分野で女性と男性の参画割合に大きな差が存在することが見て取れる。教育は、GGIの4つのジャンルすべての人材を輩出するため、「女性は文系、男性は理系」といわれる教育での男女差は経済をはじめ他分野の女性参画にも確実に影響している。そして、その理由として想定されるのが、進路選択における男女共同参画と性別役割分担意識の影響である。

したがって、社会における固定的な性別役割分担意識の解消と男女共同参画の理解促進に向けて、教育と学習についての大阪市民の意識と実態を調査した結果にもとづき分析をした。

2. 調査目的

男女共同参画の理解促進と固定的な性別役割分担意識の解消に向けて、教育・学習を大きなテーマとして実態と意識を調査・分析する。「1. 固定的な性別役割分担意識について」により、現在と子ども期の固定的な性別役割分担意識と実態を把握する。「2. これまで自分を取り巻いてきた環境や経験、進路について」では、学生期の学習と進路選択における男女差について、「3. 社会人の学習活動について」では社会人以降の学習活動の男女差、ライフステージによる違いなどの実態を探る。

また、「1. 固定的な性別役割分担意識について」により明らかになった固定的な性別役割分担意識による進路選択や職業選択（「2. これまで自分を取り巻いてきた環境や経験、進路について」）、社会人の学習活動（「3. 社会人の学習活動について」）への影響についても検討する。

男女共同参画に関連する啓発の対象や内容、手法など、男女共同参画に関する事業の充実に向けた参考とする。

1. 固定的な性別役割分担意識について

本調査では、男女共同参画の基本的な課題である固定的な性別役割分担意識について、その変化や影響を与えた人（もの）等を明らかにする。よりターゲットを絞った効果的な啓発対象、またはライフステージの設定、また、それに応じた啓発内容等を検討する際の参考とする。

2. これまで自分を取り巻いてきた環境や経験、進路について

令和6（2024）年度の学校基本統計（文部科学省）によると、理学系における女子学生の割合は約30%、工学系における女子学生の割合は約15%である。理工系を選択する女性の割合が低いことは、科学技術発展のために男女が共に参画し、多様な視点や発想を取り入れていくために解決すべき課題である。

家庭や学校での経験、進路選択の過程を調査することで、女性の進路や学業の選択に、固定的な性別役割分担意識による周囲の期待や制約などの要因が与える影響を把握する。女子学生たちの周囲のおとなを含め、女子学生の理工系分野への進路選択促進に向けた環境づくりに効果的な啓発の対象、内容等を検討する際の参考とする。

3. 社会人の学習活動について

女性も男性も一人ひとりがライフステージに応じた様々な学習活動を行うことは、意欲と希望に応じた多様な生き方の選択の一助となる。社会人の生涯学習の機会の実態、性別・ライフステージによる学習の機会の実態や意識の差異、今後の学習意向を把握し、学習活動の時間や環境の制約がある人への対応策を検討するなど、男女共同参画に関連する学習機会の充実に向けた参考とする。

3. 調査項目

設問項目一覧は以下のとおりである。

S Q 1	あなたの性別をお答えください。(ひとつだけ)
S Q 2	あなたの年齢をお答えください。(ひとつだけ)
S Q 3	あなたの現在のお住まいはどちらですか。(ひとつだけ)
問 1	あなたは結婚していますか。(ひとつだけ)
問 2	あなたには子どもがいますか。(ひとつだけ)
問 3	あなたには子どもが何人いますか。(ひとつだけ)
問 4	あなたの子どもの性別を教えてください。(ひとつだけ)
問 5	あなたの子どもの最も年齢が低い人についてお答えください。(ひとつだけ)
問 6	あなたの就労状態について教えてください。(ひとつだけ)
問 7	あなたが、はじめて社会人になる前に卒業した学校を教えてください。(ひとつだけ)
問 8	「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について、あなたはどのように思われますか。(ひとつだけ)
問 9	問 8 で回答した考え方を選んだ理由について、あてはまるものすべてに○をつけてください。(○はいくつでも)
問 10	問 8 で回答した考え方について、影響を与えた人をあげるとすれば誰(何)ですか。(いくつでも)
問 11	「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について、あなたは学生のころ、どのように思っていましたか。(ひとつだけ)
問 12	「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について、変化したのはいつごろですか。(ひとつだけ)
問 13	「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方について、あなたはどのように思われますか。(ひとつだけ)
問 14	「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方について、あなたが学生のころどのように思っていましたか。(ひとつだけ)
問 15	あなたが子どものころ、あなたの家族では、仕事や家事の分担について、どのようにしておられましたか。(ひとつだけ)
問 16	あなたが中学生(a)・高校生(b)の頃に好きだった科目を教えてください。(いくつでも)
問 17	あなたが高校・高等専門学校への進学時(a)、短期大学・専門学校・大学・大学院への進学時(b)、進路選択をした際に、あなたが重視したことはどのようなことですか。 (3つまで)

問 18	あなたが高校・高等専門学校への進学時 (a)、短期大学・専門学校・大学・大学院への進学時 (b)、進路選択をした際に、ご両親が重視していたことはどのようなことですか。(3つまで)
問 19	自分の進路選択や職業選択において、誰 (何) の影響が大きかったと感じていますか。(3つまで)
問 20	あなたは、自分の最終学歴となる学校の選択について満足していますか。現在学生の方は、今在学している学校の選択について教えてください。(ひとつだけ)
問 21	問 20 で満足していないと答えた理由を教えてください。(3つまで)
問 22	あなたが望む進路選択ができなかった理由を教えてください。(3つまで)
問 23	あなたは学校を卒業して以降、余暇等を利用して積極的に何かを学ぶ機会がありましたか。また、どのようなことについて学んだかも教えてください。(いくつでも)
問 24	あなたが仕事のために学んだ／学んでいる主な理由を教えてください。(3つまで)
問 25	あなたは仕事のためにどのような方法で学びましたか／学んでいますか。(いくつでも)
問 26	あなたが仕事のためにより充実した学習活動をするために必要なことはなんですか。(3つまで)
問 27	あなたは学校を卒業して以降、仕事以外 (家庭や地域活動・社会貢献活動、または自分の趣味や興味、関心など) のためにどのような方法で学びましたか。(いくつでも)
問 28	あなたは学校を卒業して以降、仕事以外 (家庭や地域活動・社会貢献活動、または自分の趣味や興味、関心など) のための学習活動をするための主な効果はどのようなものだと思いますか。(3つまで)
問 29	あなたが学校を卒業して以降仕事以外 (家庭や地域活動・社会貢献活動、または自分の趣味や興味、関心など) のための学習活動をするために必要と考えることはなんですか。(3つまで)
問 30	あなたはこれまでに男女共同参画に関して、どのような方法で学びましたか。(いくつでも)

4. 調査方法

インターネット・モニターに対するアンケート調査

5. 調査期間

令和7年10月31日(金)～11月7日(金)

6. 調査対象・サンプル

大阪市在住の20歳～59歳の男女1,200人

主に性別による差異を把握することを目的に、年代ごとに均等割り付けを行った





	20代	30代	40代	50代	計
男性	150人	150人	150人	150人	600人
女性	150人	150人	150人	150人	600人
男女計	300人	300人	300人	300人	1,200人

7. 報告書内で使用する用語、定義

末子	家族で最も年齢が低い子ども
正規雇用	常勤の社員・職員
非正規雇用	アルバイト、パート、労働者派遣事業所の派遣社員、契約社員、嘱託等
高等学校	全日制、定時制、通信制すべて含む

8. 集計結果について

- ・ グラフ内の数字は特記のない限り、百分比（%）であり、少数点第2位を四捨五入したものを表示している。このため、百分比の合計値が100にならないことがある。複数回答の場合は、百分比の合計が100を超えることがある。
- ・ 「n」は、質問に対する回答者数で、100%が何人の回答に相当するかを示す基数である。
- ・ n=30以下の場合は参考値として扱う。
- ・ 表のセルの色分けは以下のとおりである。

	: 全体より10ポイント以上
	: 全体より5ポイント以上
	: 全体より5ポイント以下
	: 全体より10ポイント以下

Ⅱ 調査結果

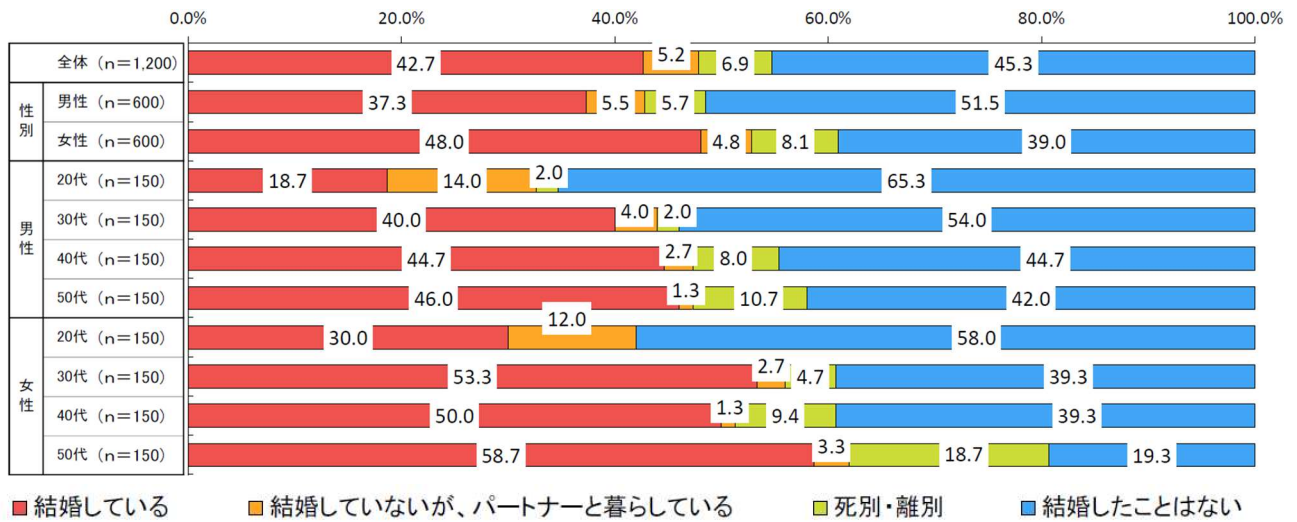
1. 基本属性

本調査における回答者の基本属性を以下にまとめる。

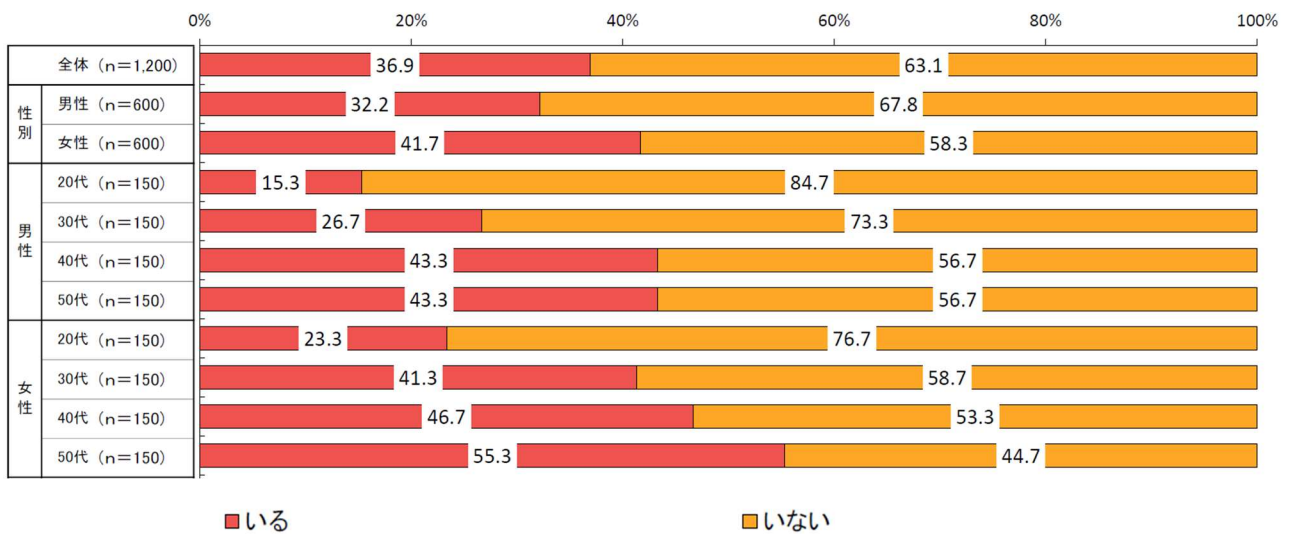
性別・年代（再掲）

	20代	30代	40代	50代	計
男性	150人	150人	150人	150人	600人
女性	150人	150人	150人	150人	600人
男女計	300人	300人	300人	300人	1,200人

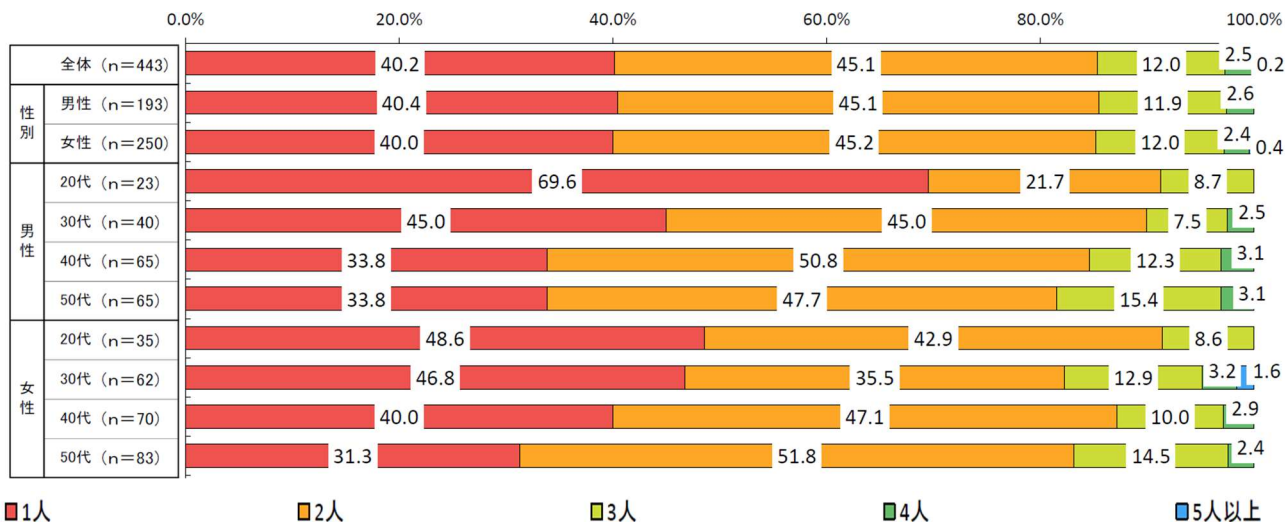
婚姻状況



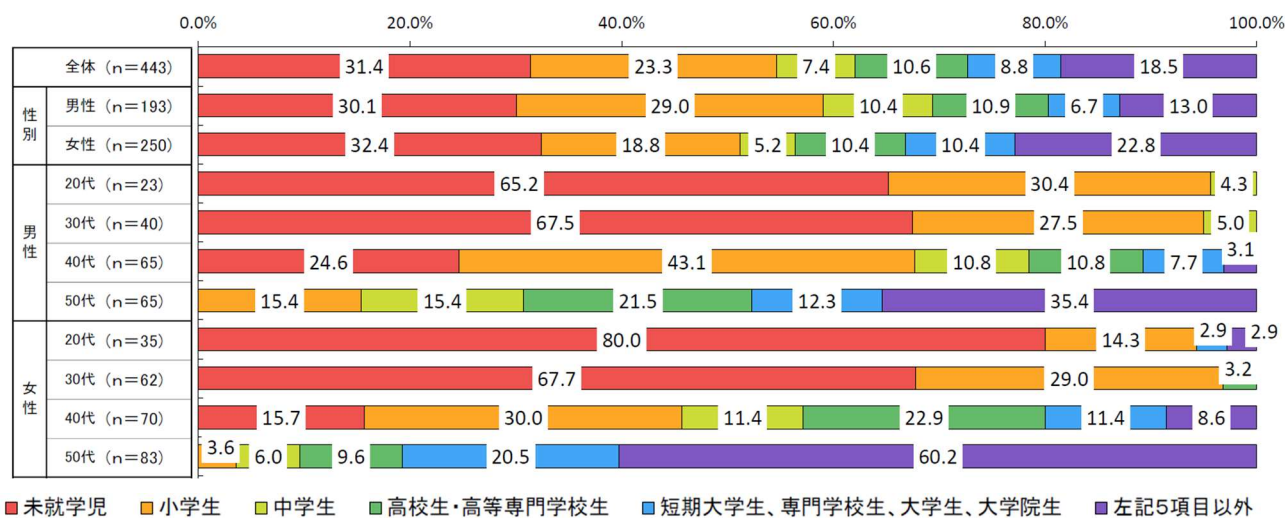
子どもの有無



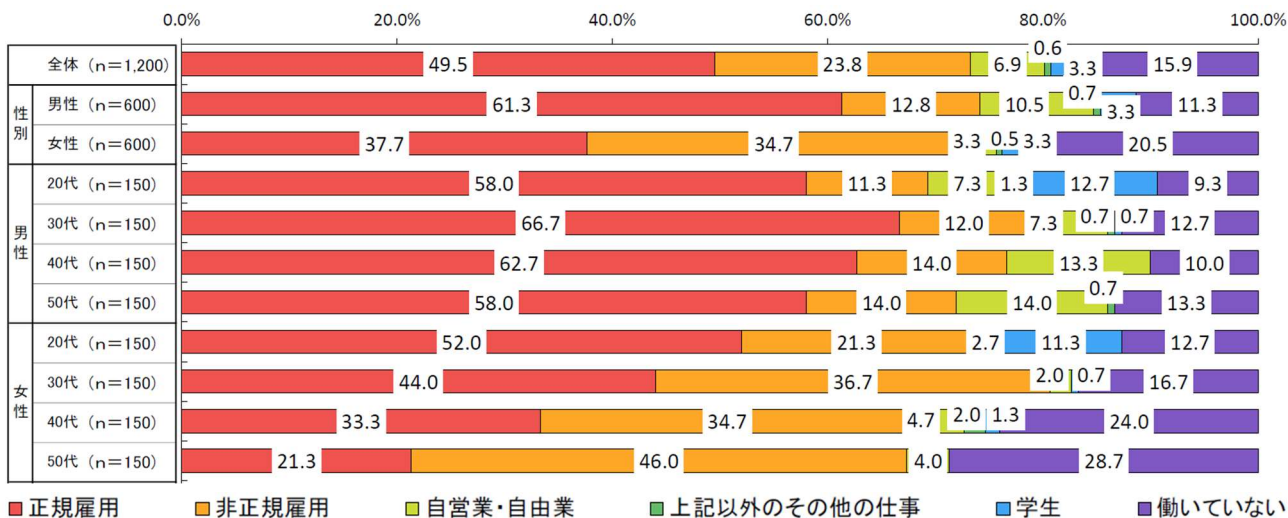
子どもの数



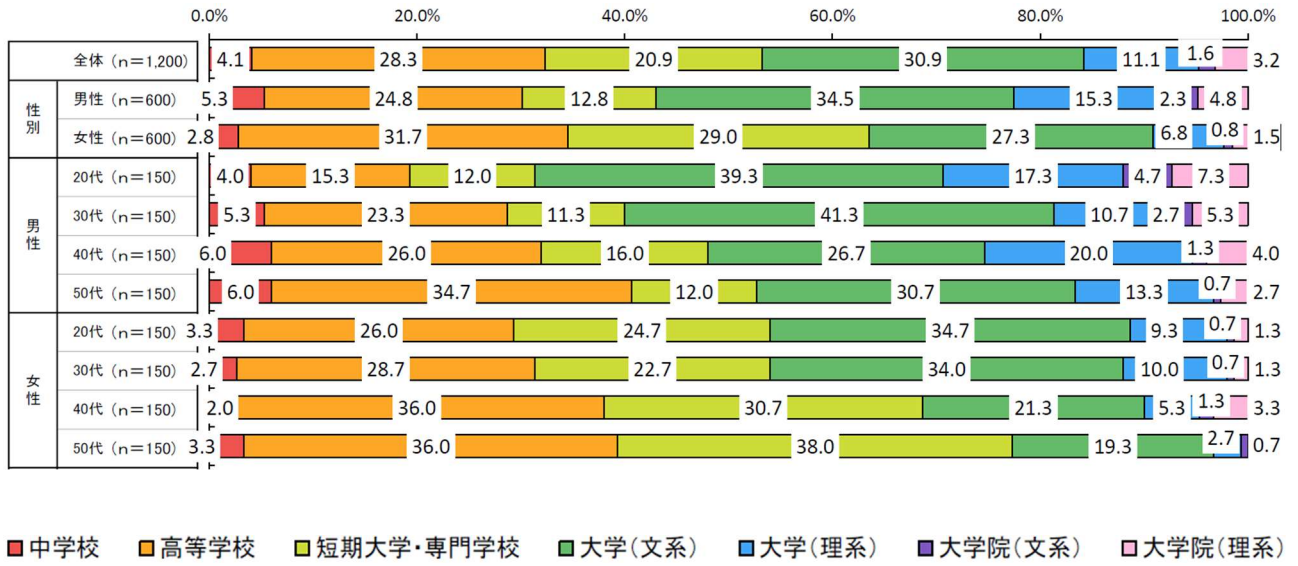
末子の就学状況



就労状況



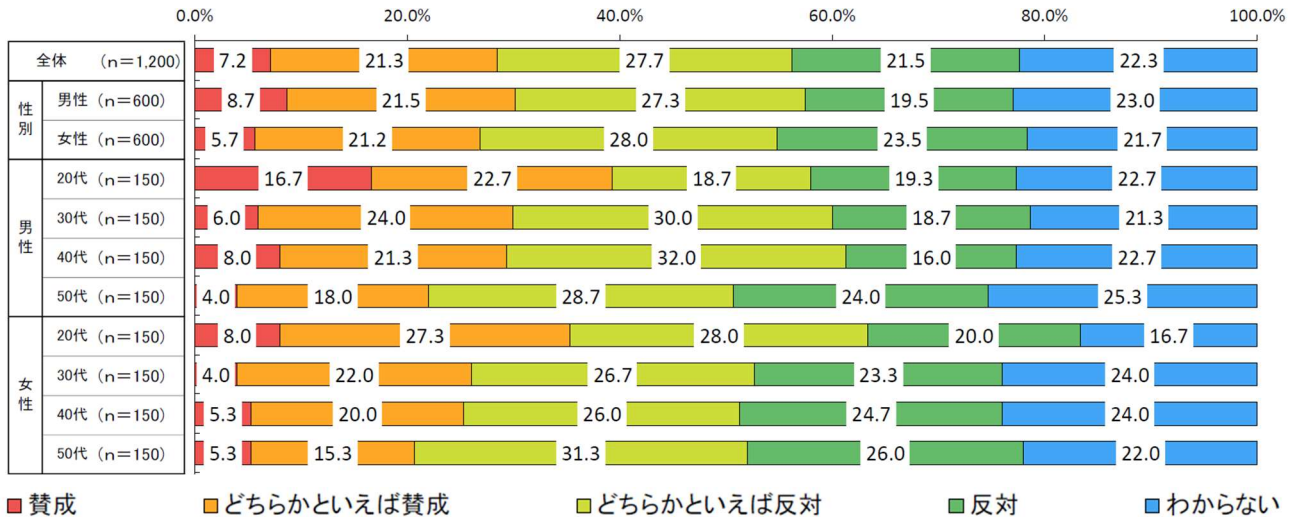
最終学歴



2. 固定的な性別役割分担意識について

問8 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について、あなたはどのように思われますか。(ひとつだけ)

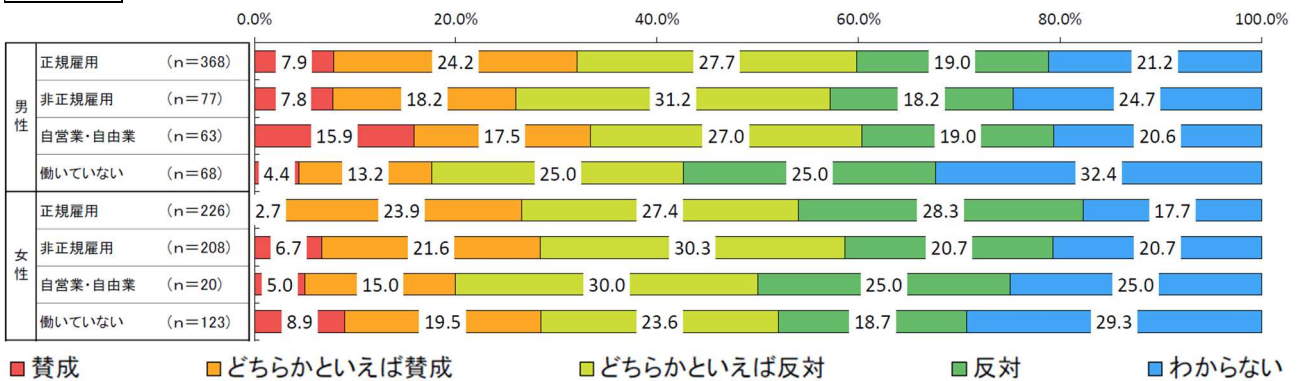
図表1-1 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について [性別・年代]



「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は、49.2%、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」は28.5%であった。「わからない」とする人の割合は、22.3%であった。

性別・年代別にみると、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合は、男女とも20代が最も高い(男性39.4%、女性35.3%)。次いで、30代(男性30.0%、女性26.0%)、40代(男性29.3%、女性25.3%)、50代(男性22.0%、女性20.6%)と続いている。

図表1-2 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方と就労状況(性別・就労状況)

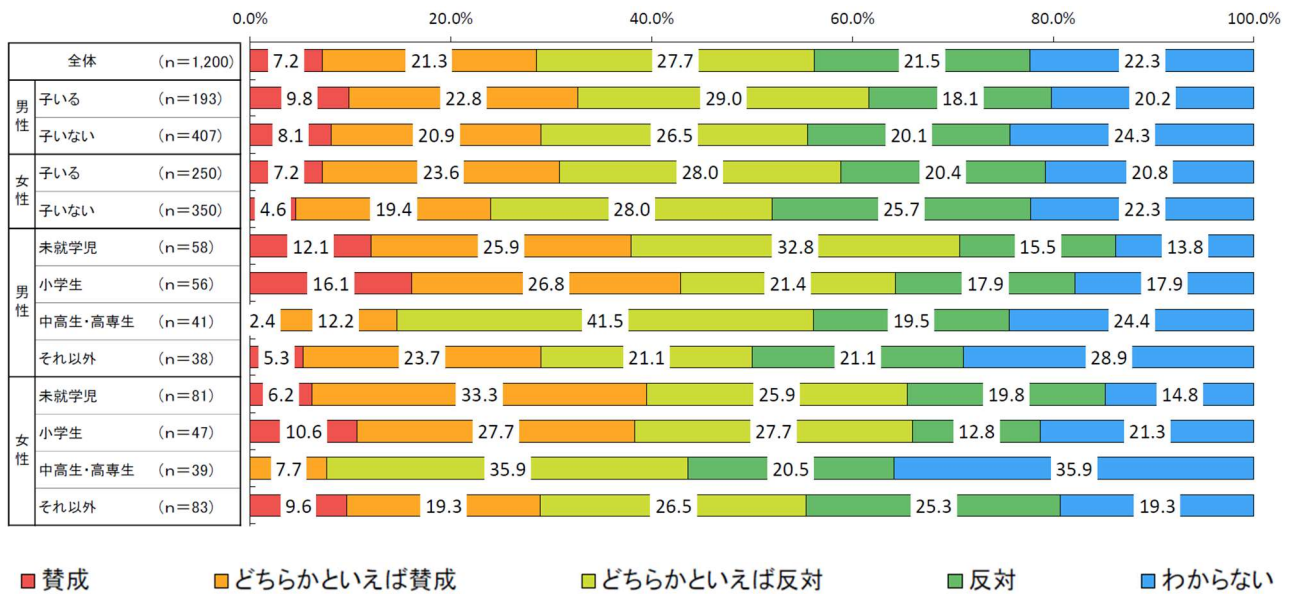


※その他の仕事、学生は参考値のためグラフからは省略

男性で「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合が高いのは、自営業・自由業で33.4%、次いで正規雇用が32.1%であった。「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合が高いのは、働いていないが50.0%、次いで非正規雇用49.4%であった。

女性で「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合が高いのは、働いていないが最も高い28.4%、次いで非正規雇用が28.3%であった。「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合が高いのは、自営業・自由業(参考値)を除くと、正規雇用が55.7%、次いで非正規雇用51.0%であった。

図表1-3 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方と子どもの状況(性別・子どもの有無/末子の就学状況)



子どもの有無についてみると、男女ともに「子いる」の人の方が「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)とする人の割合が高い。末子が「未就学児」「小学生」である人は、それ以外の人と比べて、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)とする人の割合が男女ともに高い。

問9 問8で「どちらかといえば賛成」「賛成」を選んだ理由について、あてはまるものすべてを選んでください。(いくつでも)

図表2-1 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方に賛成である理由 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	
			日本の伝統的な家族の在り方だと思っから	自分の親もそのようにしていたから	男性が働いた方が、多くの収入を得られると思っから	女性が家庭を中心にした方が、子どもの成長などにとって良いと思っから	家事・育児・介護と両立しながら、男女ともに働き続けるのは大変だと思っから	その他	
全体		342	29.5	24.0	36.8	37.1	38.6	0.9	
性別	男性	181	39.2	27.6	38.1	34.3	35.4	1.1	
	女性	161	18.6	19.9	35.4	40.4	42.2	0.6	
年代	男性	20代	59	40.7	25.4	42.4	20.3	23.7	0.0
		30代	45	37.8	22.2	40.0	42.2	35.6	2.2
		40代	44	34.1	36.4	40.9	38.6	40.9	2.3
		50代	33	45.5	27.3	24.2	42.4	48.5	0.0
	女性	20代	53	22.6	24.5	30.2	28.3	52.8	1.9
		30代	39	15.4	28.2	53.8	33.3	30.8	0.0
		40代	38	13.2	13.2	23.7	60.5	28.9	0.0
		50代	31	22.6	9.7	35.5	45.2	54.8	0.0

全体でみると「家事・育児・介護と両立しながら、男女ともに働き続けるのは大変だと思っから」とする人の割合が38.6%と最も高い。特に20代女性(52.8%)、50代女性(54.8%)が高い。次いで、「女性が家庭を中心にした方が、子どもの成長などにとって良いと思っから」が37.1%、「男性が働いた方が、多くの収入を得られると思っから」が36.8%と続いている。

「日本の伝統的な家族の在り方だと思っから」については男性39.2%、女性は18.6%と最も男女差が大きかった。次いで男女差が大きいものは、「自分の親もそのようにしていたから」(男性27.6%、女性19.9%)、「家事・育児・介護と両立しながら、男女ともに働き続けるのは大変だと思っから」(男性35.4%、女性42.2%)となっている。

問 10 問8で回答した考え方について、影響を与えた人をあげるとすれば誰(何)ですか。(いくつでも)

図表3-1 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方への影響 [性別・年代]

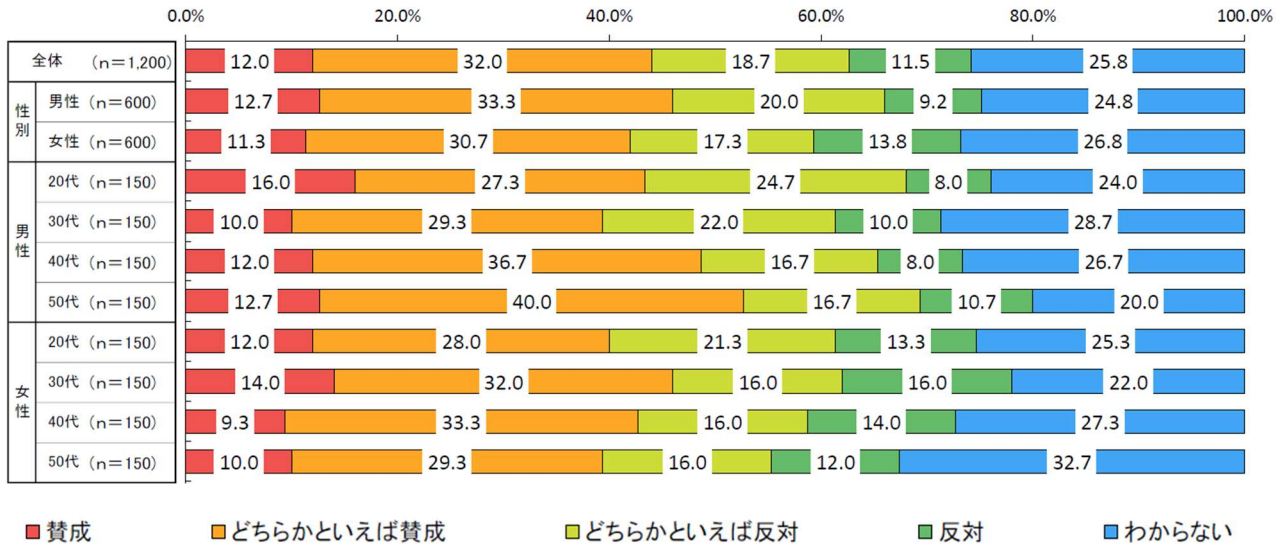
(%)

		回答者数(n)	1	2	3	4	5	6	7	8	
			父親	母親	親以外の家族・親族	友人や先輩	学校や塾、習い事の先生	本、漫画、テレビやアニメ等	インターネットやSNS	その他	
全体		1,200	26.8	39.4	12.0	17.1	4.3	15.8	26.1	12.3	
性別	男性	600	29.5	35.0	11.5	14.2	5.5	17.7	27.7	11.7	
	女性	600	24.2	43.8	12.5	20.0	3.0	14.0	24.5	12.8	
年代	男性	20代	150	32.7	42.0	10.0	13.3	7.3	14.0	27.3	7.3
		30代	150	34.7	40.0	12.7	15.3	6.7	18.0	30.7	9.3
		40代	150	26.7	32.7	11.3	17.3	5.3	18.0	29.3	11.3
		50代	150	24.0	25.3	12.0	10.7	2.7	20.7	23.3	18.7
	女性	20代	150	34.0	53.3	12.7	18.0	1.3	14.0	30.7	3.3
		30代	150	24.0	44.7	16.0	22.7	3.3	12.7	24.7	13.3
		40代	150	23.3	40.7	8.7	19.3	3.3	15.3	26.7	16.0
		50代	150	15.3	36.7	12.7	20.0	4.0	14.0	16.0	18.7

全体で見ると、「母親」とする人の割合が39.4%と最も高く、「父親」が26.8%、「インターネットやSNS」が26.1%と続く。最も男女差が見られたのは「母親」で男性が35.0%、女性が43.8%となっている。全ての性別・年代で「母親」とする人の割合が最も高い。女性で「母親」と回答した人の割合は、若い世代になるにつれ高くなる。

問 11 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について、あなたは学生のころ、どのように思っていましたか。(ひとつだけ)

図表4-1 学生のころの「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について [性別・年代]



「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は 30.2%、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」は 44.0%であった。「わからない」とする人の割合は、25.8%であった。

性別・年代別にみると、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合は、男性は 50 代で最も高く(52.7%)、女性は 30 代で最も高い(46.0%)。次いで 40 代(男性 48.7%、女性 42.6%)、20 代(男性 43.3%、女性 40.0%)と続いている。「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は、男女ともに 20 代が最も高い(男性 32.7%、女性 34.6%)。

問 8 の現在の考え(図表 1-1)と比較した場合、「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合が、学生のころよりも現在の方がほとんどの性別・年代で高くなっている。ただし、20 代男性のみ、現在のほうが賛成とする人の割合が高い。

図表4-2 学生のころと現在の「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方の比較 [性別]

男性

(%)

学生のころの考え方	現在の考え方	
賛成 (n=76)	賛成	36.8
	どちらかといえば賛成	34.2
	どちらかといえば反対	10.5
	反対	7.9
	わからない	10.5
どちらかといえば賛成 (n=200)	賛成	7.5
	どちらかといえば賛成	40.5
	どちらかといえば反対	25.0
	反対	10.0
	わからない	17.0
どちらかといえば反対 (n=120)	賛成	3.3
	どちらかといえば賛成	6.7
	どちらかといえば反対	56.7
	反対	24.2
	わからない	9.2
反対 (n=55)	賛成	0.0
	どちらかといえば賛成	5.5
	どちらかといえば反対	9.1
	どちらかといえば反対	83.6
	わからない	1.8
わからない (n=149)	賛成	3.4
	どちらかといえば賛成	7.4
	どちらかといえば反対	22.1
	反対	10.7
	わからない	56.4

女性

(%)

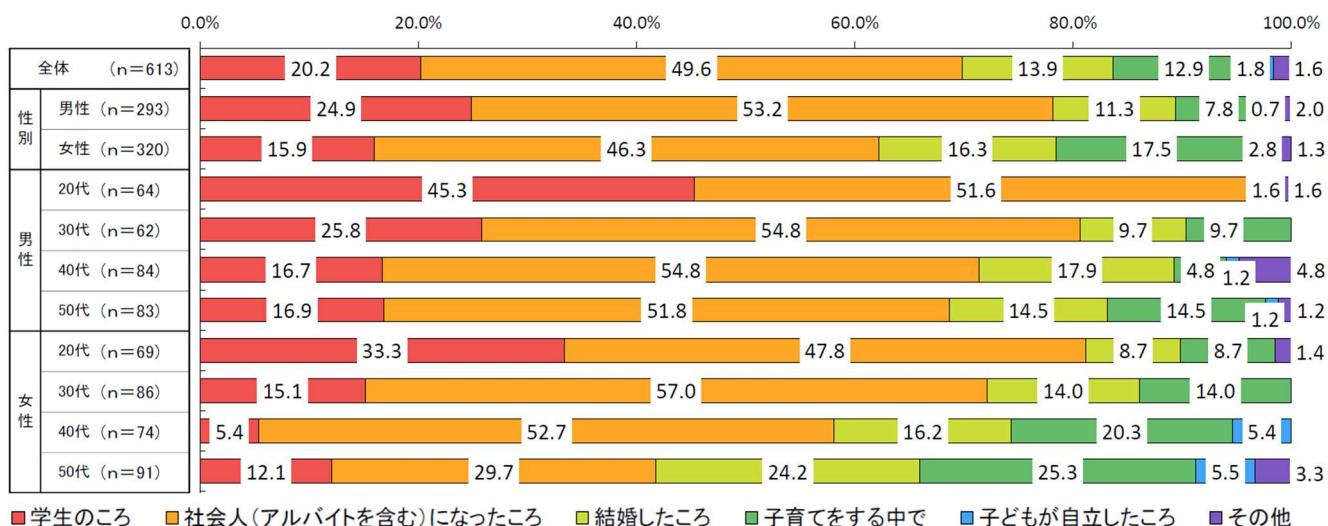
学生のころの考え方	現在の考え方	
賛成 (n=68)	賛成	33.8
	どちらかといえば賛成	41.2
	どちらかといえば反対	10.3
	反対	5.9
	わからない	8.8
どちらかといえば賛成 (n=184)	賛成	3.3
	どちらかといえば賛成	39.1
	どちらかといえば反対	26.1
	反対	9.8
	わからない	21.7
どちらかといえば反対 (n=104)	賛成	1.0
	どちらかといえば賛成	10.6
	どちらかといえば反対	51.0
	反対	26.9
	わからない	10.6
反対 (n=83)	賛成	0.0
	どちらかといえば賛成	1.2
	どちらかといえば反対	15.7
	反対	77.1
	わからない	6.0
わからない (n=161)	賛成	2.5
	どちらかといえば賛成	9.3
	どちらかといえば反対	29.2
	反対	16.8
	わからない	42.2

学生のころと現在の「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方の変化をみると、どの考え方も変化がない人の割合が最も高い。変化した人をみると、男女ともに反対よりの変化をした人の割合が高い。学生のころの考え方についてわからないと回答した人は、現在も「わからない」と回答した人の割合が最も高く、男性で56.4%、女性で42.2%となっている。次いで、男女ともに「どちらかといえば反対」に変化した人の割合が高く、男性で22.1%、女性で29.2%となっている。

問 12 【問 8 と問 11 の回答が相違している場合】

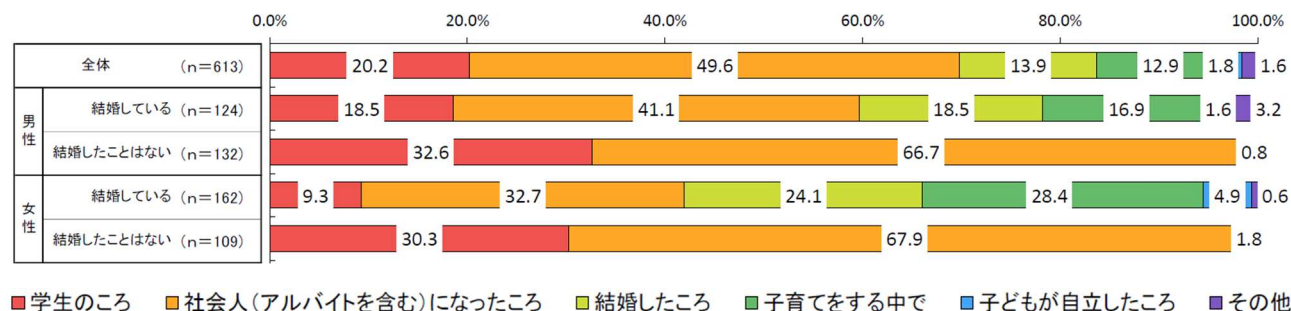
「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方について、変化したのはいつごろですか。(ひとつだけ)

図表5-1 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方が変化した時期 [性別・年代]



男性は仕事、女性は家庭を中心にするという考え方が変化した時期について、「社会人(アルバイトを含む)」になったころと回答する人の割合が 49.6%と最も高い。次いで、「学生のころ」と回答した人の割合が 20.2%、「結婚したころ」と回答した人の割合が 13.9%、「子育てをする中で」と回答した人の割合が 12.9%であった。性別で見ると、「子育てをする中で」と回答する人の割合は女性で 17.5%、男性 7.8%となっており、女性の方が 9.7 ポイント高い。

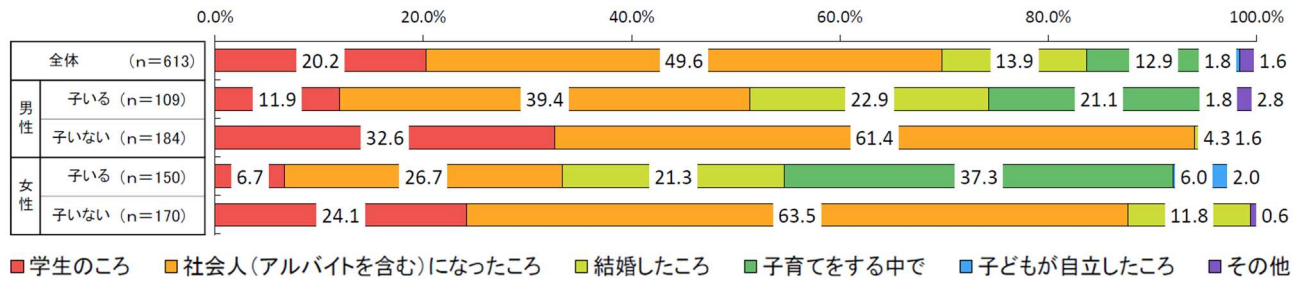
図表5-2 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方が変化した時期と婚姻状況



結婚している男女が「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方が変化した時期として最も高い割合を示したのはいずれも社会人(アルバイトを含む)になったころとしており、男性が 41.1%、女性が 32.7%となっている。

結婚している人が「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方が変化した時期として、「結婚したころ」と回答した男性は 18.5%であったのに対し、女性は 24.1%となっており、女性の方が割合が高い。

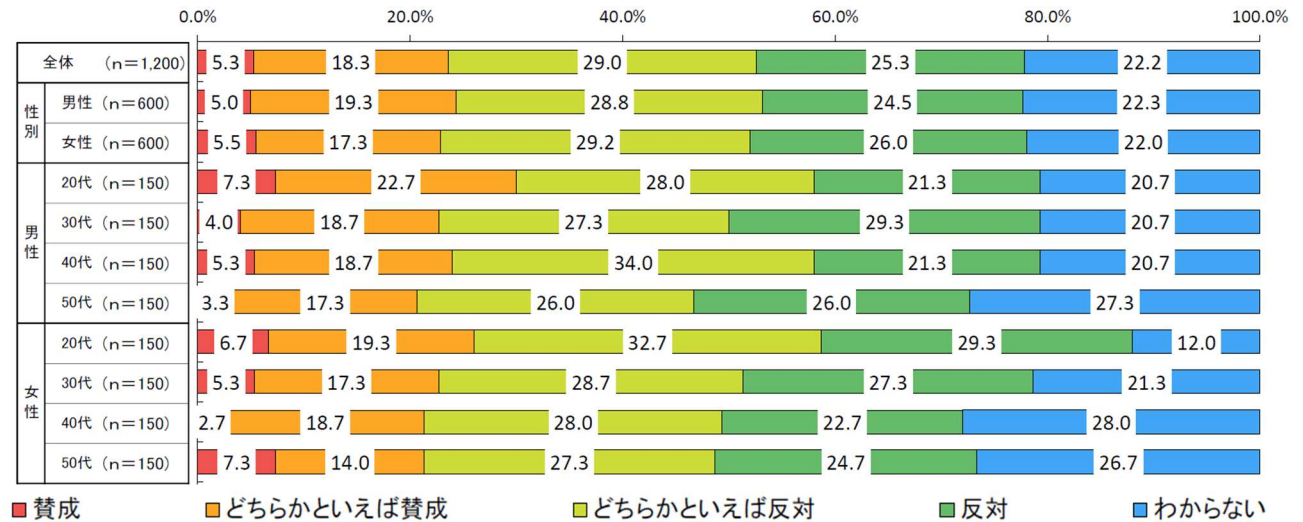
図表5-3 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方が変化した時期と子どもの有無



男性は仕事、女性は家庭を中心にするという考え方が変化した時期について、子どもがいる女性は、「子育てをする中で」と回答した人の割合が37.3%と他の時期に比べて最も高い。次いで「社会人になったころ」(26.7%)、「結婚したころ」(21.3%)と続いている。子どもがいる男性で「子育てをする中で」とした人の割合は21.1%であり、女性の方が16.2ポイント高い。

問 13 「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方について、あなたはどのように思われますか。(ひとつだけ)

図表6-1 「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方について [性別・年代]



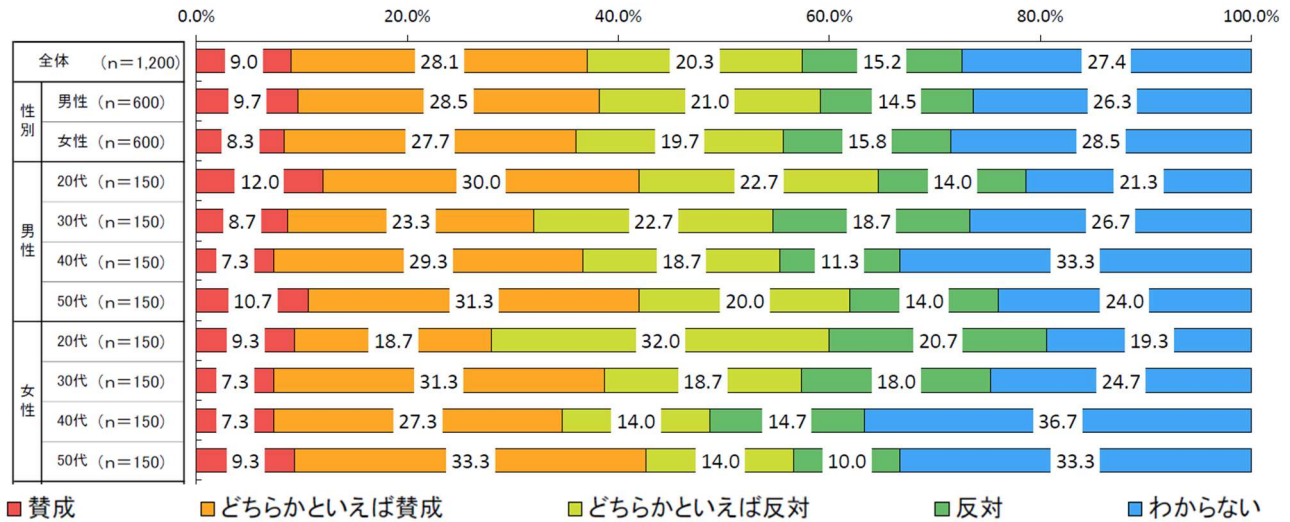
全体で見ると、「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は、54.3%で、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」23.6%より高い割合だった。

性別・年代別にみると、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合は、男女とも20代が最も高い(男性30.0%、女性26.0%)。次いで、男性は40代(24.0%)、30代(22.7%)、女性は30代(22.6%)、40代(21.4%)と続いている。「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は、男性は30代(56.6%)女性は20代(62%)が最も高い。

問 8 (図表1-1)と比較して50代女性以外は、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」と回答した人の割合が低い。

問 14 「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方について、あなたが学生のころどのように思っていましたか。(ひとつだけ)

図表7-1 学生のころの「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方について
[性別・年代]



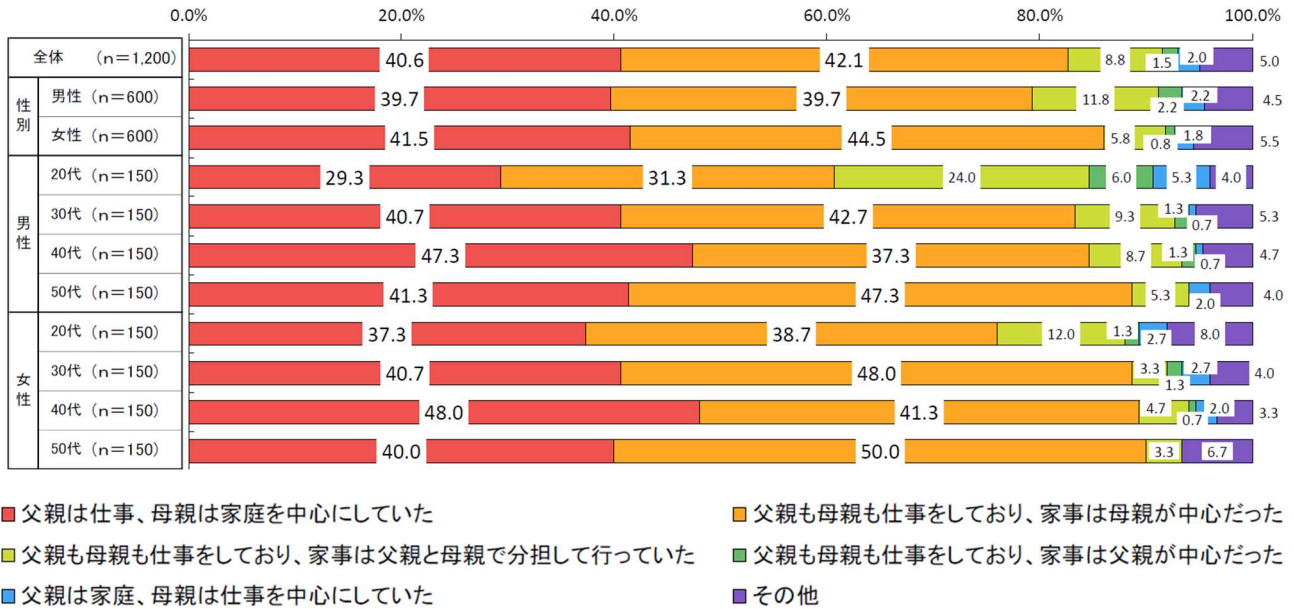
全体で見ると、「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は、35.5%で、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」37.1%より低い割合だった。

性別・年代別にみると、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合は、男性は50代と20代、女性は50代が最も高い(男性42.0%、女性42.6%)。次いで、男性は40代(36.6%)、30代(32.0%)、女性は30代(38.6%)、40代(34.6%)と続いている。「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とする人の割合は、男性は30代(41.4%)女性20代(52.7%)が最も高い。男女で「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」とする人の割合のポイント差が最も大きいのは20代(男性42.0%、女性28.0%)だった。

現在の考えと比較した場合(図表6-1)、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)」と回答した人は、すべての性別・年代で割合が高く、「反対(「どちらかといえば反対」+「反対」)」とした人の割合は低い。

問 15 あなたが子どものころ、あなたの家族では、仕事や家事の分担について、どのようにしておられましたか。
(ひとつだけ)

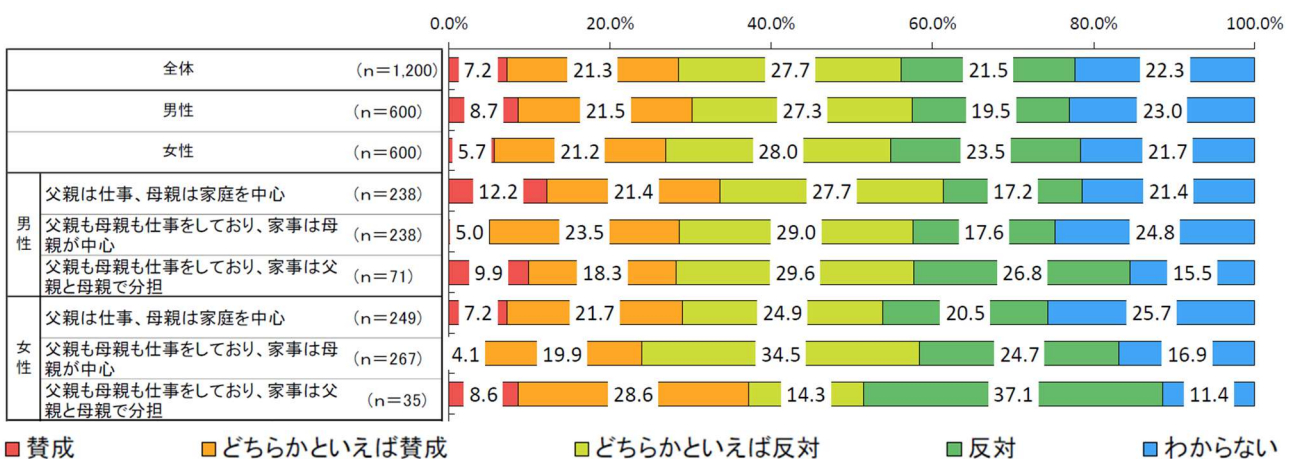
図表8-1 子どものころの家族内での役割分担について [性別・年代]



子どものころの家庭内での役割分担について、全体で見ると「父親も母親も仕事をしており、家事は母親が中心だった」と回答する人の割合が 42.1%と最も高かった。次いで、「父親は仕事、母親は家庭を中心にしていた」との回答が 40.6%だった。

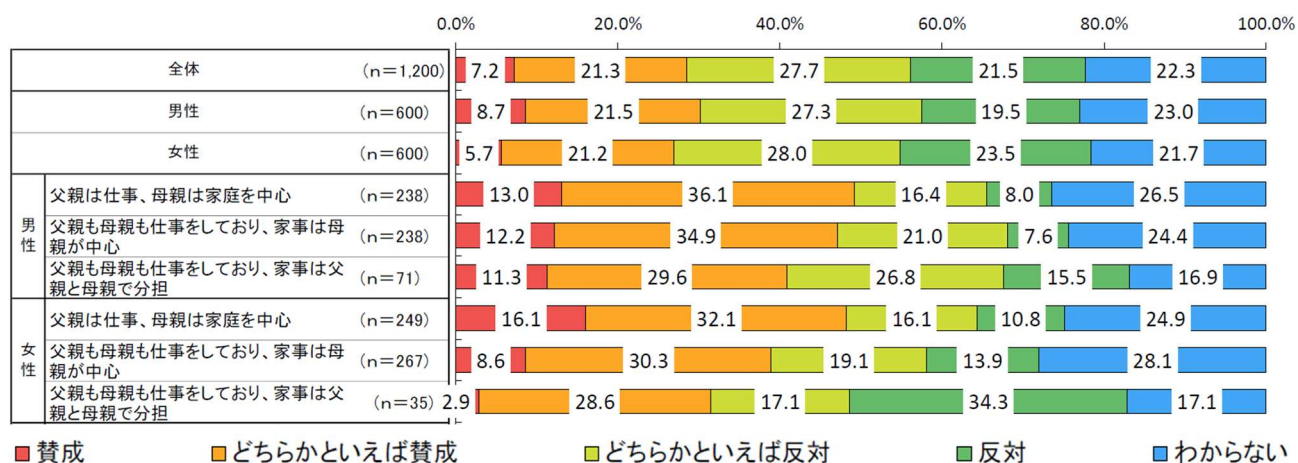
性別・年代別で見ると、「父親も母親も仕事をしており、家事は父親と母親で分担して行っていた」と回答した人の割合は、男性の 20 代で 24.0%となっており、女性の 20 代 (12.0%) と比較して 12.0 ポイント高い。男性の他の年代と比較してもその差は 2 倍～4 倍となっている。

図表8-2 「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方と子どものころの家族内の仕事・家事分担の状況



子どものころの家族での仕事や家事の分担について、「父親も母親も仕事をしており、家事は父親と母親で分担」と回答した男性は、「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」ことに対して「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)と回答した人の割合が 28.2%と男性全体の 30.2%を 2 ポイント下回っている。一方、「父親も母親も仕事をしており、家事は父親と母親で分担」と回答した女性は、「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」ことに対して「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)と回答した人の割合が 37.2%と女性全体の 26.9%を 10.3 ポイント上回っている。

図表8-2 子どものころの「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方と子どものころの家族内の仕事・家事分担の状況



子どものころの家族での仕事や家事の分担について、「父親も母親も仕事をしており、家事は父親と母親で分担」と回答した人は、「父親は仕事、母親は家庭を中心」や「父親も母親も仕事をしており、家事は母親が中心」であった人よりも、学生ころの「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方に対して、「賛成(「どちらかといえば賛成」+「賛成」)とする人の割合が低い。

3. これまで自分を取り巻いてきた環境や経験、進路について

問 16-a あなたが中学生の頃に好きだった科目を教えてください。(いくつでも)

図表9-1 中学校の頃好きだった科目 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	7	
			国語	数学	理科 (生物、化学、物理、地学等)	社会 (歴史、地理、公民等)	英語	その他の科目	どれも好きではなかった	
全体		1,200	25.2	22.8	18.3	28.0	19.6	13.4	20.9	
性別	男性	600	20.3	27.8	25.5	38.3	16.7	8.2	20.7	
	女性	600	30.0	17.8	11.2	17.7	22.5	18.7	21.2	
年代	男性	20代	150	22.0	34.7	30.0	38.7	16.7	9.3	16.7
		30代	150	25.3	25.3	24.0	34.0	12.7	12.7	24.7
		40代	150	15.3	28.7	24.0	39.3	16.7	4.0	23.3
		50代	150	18.7	22.7	24.0	41.3	20.7	6.7	18.0
	女性	20代	150	31.3	19.3	8.7	22.0	23.3	18.7	20.0
		30代	150	24.0	20.7	16.0	20.7	20.0	19.3	22.7
		40代	150	28.0	11.3	8.0	10.7	24.0	20.0	24.0
		50代	150	36.7	20.0	12.0	17.3	22.7	16.7	18.0

中学校の頃に好きだった科目について、全体で見ると「社会（歴史、地理、公民等）」と回答した人の割合が28.0%と最も高い。次いで、「国語」25.2%、「数学」22.8%と続いている。

性別で見ると、男性は、「社会（歴史、地理、公民等）」とする人の割合が38.8%と最も高く、次いで、「数学」27.8%、「理科（生物、化学、物理、地学等）」25.5%と続いている。女性は、「国語」とする人の割合が30.0%と最も高く、次いで「英語」22.5%、「どれも好きではなかった」21.2%と続いている。

問 16-b あなたが高校生の頃に好きだった科目を教えてください。(いくつでも)

図表9-2 高校の頃好きだった科目 [性別・年代]

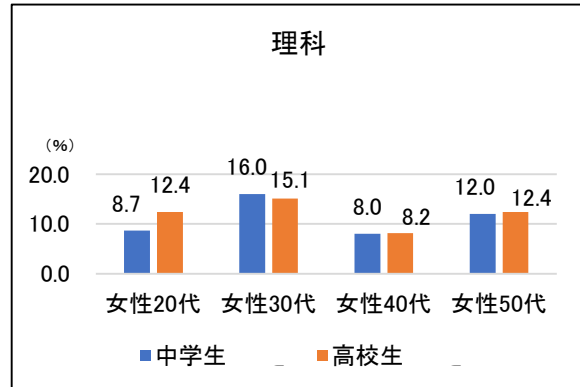
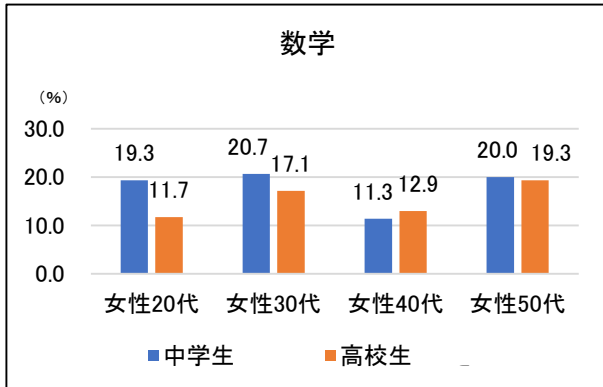
		回答者数(n)	(%)							
			1	2	3	4	5	6	7	
			国語	数学	理科(生物、化学、物理、地学等)	社会(歴史、地理、公民等)	英語	その他の科目	どれも好きではなかった	
全体		1,151	21.7	19.5	18.0	24.9	19.5	14.3	22.8	
性別	男性	568	17.3	23.9	24.1	34.3	18.0	9.9	21.0	
	女性	583	26.1	15.3	12.0	15.8	20.9	18.7	24.7	
年代	男性	20代	144	20.1	34.0	29.2	33.3	18.1	10.4	16.7
		30代	142	21.1	22.5	23.9	31.7	16.9	12.7	23.2
		40代	141	12.8	22.0	21.3	33.3	15.6	6.4	27.0
		50代	141	14.9	17.0	22.0	39.0	21.3	9.9	17.0
	女性	20代	145	28.3	11.7	12.4	19.3	21.4	18.6	22.1
		30代	146	21.9	17.1	15.1	21.2	16.4	21.9	22.6
		40代	147	23.8	12.9	8.2	8.8	22.4	19.0	29.3
		50代	145	30.3	19.3	12.4	13.8	23.4	15.2	24.8

高校のころ好きだった科目について、全体で見ると「社会（歴史、地理、公民等）」と回答した人の割合が24.9%と最も高い。次いで、「国語」21.7%、「数学」19.5%と続いている。

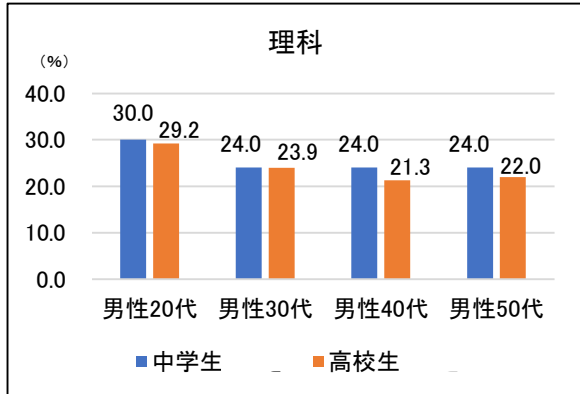
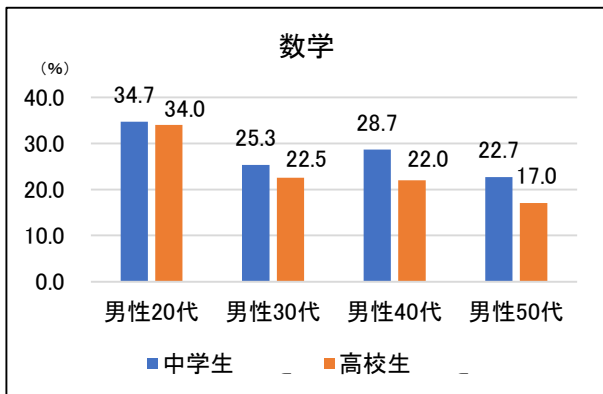
性別で見ると、男性は、「社会（歴史、地理、公民等）」とする人の割合が34.3%と最も高く、次いで、「理科（生物、化学、物理、地学等）」24.1%、「数学」23.9%と続いている。女性は、「国語」とする人の割合が26.1%と最も高く、次いで「英語」20.9%と続いている。

図表9-3 好きだった科目の推移 [性別・年代]

女性



男性



好きな科目として数学を挙げる人は、40代女性以外の年代において、中学より高校の方が割合が低くなる。特に20代女性は7.6ポイント低下した。一方で20代女性は理科が中学より高校の方が割合が高くなり、その差は3.7ポイントである。男性の20代は数学も理科も大きな差はみられない。

問 17-a あなたが高校・高等専門学校への進学時、進路選択をした際に、あなたが重視したことはどのようなことですか。(3つまで)
 ※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

図表 10-1 本人が進路選択で重視したこと [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1 進学または就職に有利であること	2 就職のための資格がとれること	3 就職の支援が行き届いていること	4 自分のやりたいことを勉強できること	5 部活動などの課外活動	6 学校の雰囲気	7 友人と通えること	8 保護者の経済的負担	9 保護者の意向	10 その他	
全体		1,151	32.2	11.6	7.6	21.8	8.9	28.3	9.6	13.2	10.5	6.6	
性別	男性	568	37.3	12.3	10.6	20.1	10.9	24.6	8.1	9.7	10.4	6.3	
	女性	583	27.3	11.0	4.8	23.5	6.9	31.9	11.1	16.6	10.6	6.9	
年代	男性	20代	144	27.8	16.7	20.1	18.1	11.8	27.8	5.6	4.2	9.0	4.9
		30代	142	42.3	11.3	7.7	23.9	12.7	27.5	7.7	9.9	12.7	5.6
		40代	141	37.6	14.2	7.1	21.3	9.2	19.1	8.5	12.8	9.9	7.8
		50代	141	41.8	7.1	7.1	17.0	9.9	24.1	10.6	12.1	9.9	7.1
	女性	20代	145	29.0	10.3	7.6	29.0	13.8	35.9	9.7	12.4	9.7	4.1
		30代	146	22.6	11.6	2.7	28.8	10.3	40.4	12.3	14.4	8.9	6.2
		40代	147	26.5	10.9	3.4	25.9	1.4	26.5	10.2	15.0	11.6	9.5
		50代	145	31.0	11.0	5.5	10.3	2.1	24.8	12.4	24.8	12.4	7.6

本人が進路選択で重視したことについて、全体で見ると「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が32.2%と最も高い。次いで、「学校の雰囲気」28.3%、「自分のやりたいことを勉強できること」21.8%と続いている。

性別・年代別にみると、男性は「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が全ての年代で最も高い。女性は「学校の雰囲気」と回答した人の割合が、20代～40代で高くなっている。50代は「自分のやりたいことを勉強できること」と回答した人の割合が他属性に比べて低く、「保護者の経済的負担」と回答した人の割合が他属性に比べて高い。

問 17-b あなたが短期大学・専門学校・大学・大学院への進学時、進路選択をした際に、あなたが重視していたことはどのようなことですか。(3つまで)

※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

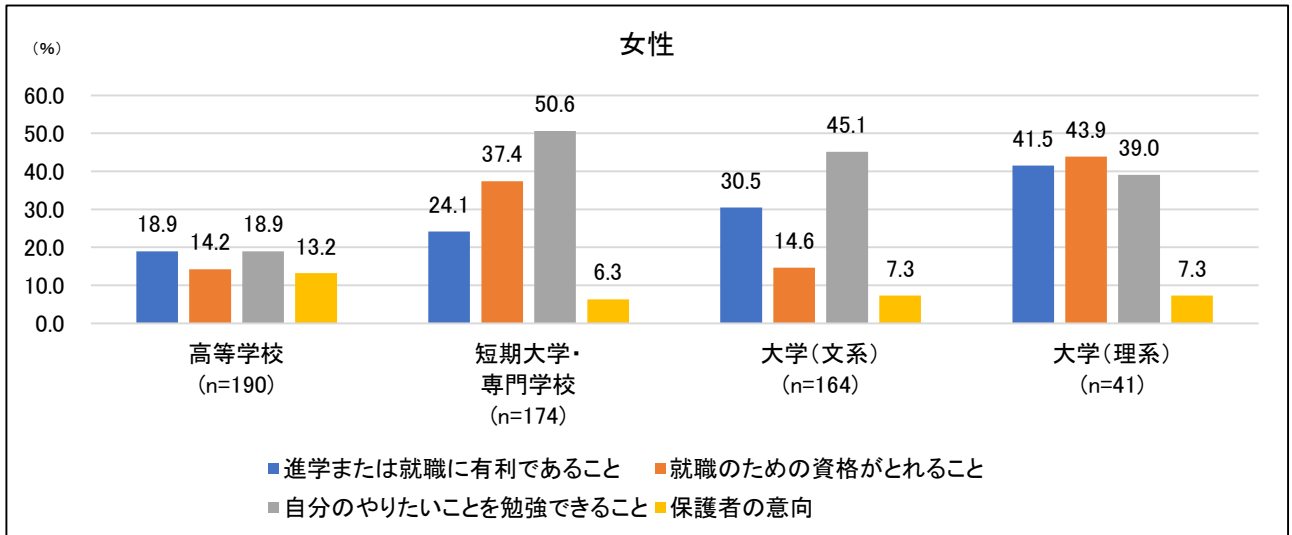
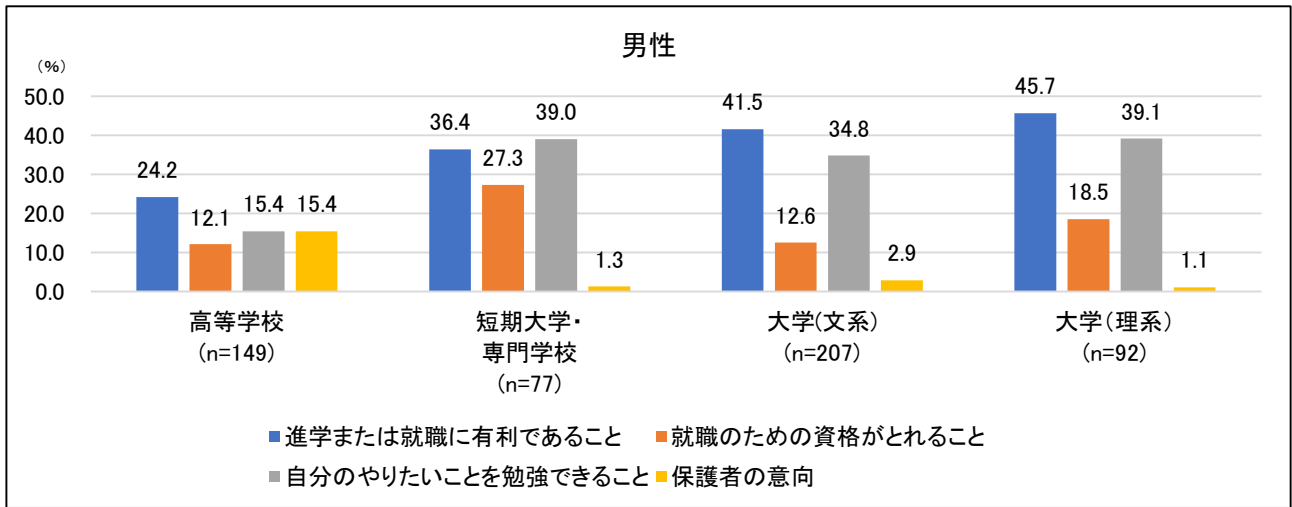
図表 10-2 本人が進路選択で重視したこと [性別・年代] (%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			進学または就職に有利であること	就職のための資格がとれること	就職の支援が行き届いていること	自分のやりたいことを勉強できること	部活動などの課外活動	学校の雰囲気	友人と通えること	保護者の経済的負担	保護者の意向	その他	
全体		812	36.2	21.9	8.9	42.0	4.9	20.2	4.1	9.1	4.7	4.2	
性別	男性	419	43.0	16.7	10.3	36.5	6.7	18.4	5.0	10.0	2.6	4.1	
	女性	393	29.0	27.5	7.4	47.8	3.1	22.1	3.1	8.1	6.9	4.3	
年代	男性	20代	121	39.7	17.4	12.4	33.9	9.9	19.8	5.8	8.3	1.7	3.3
		30代	107	43.0	16.8	14.0	41.1	3.7	16.8	3.7	7.5	2.8	5.6
		40代	102	47.1	20.6	6.9	32.4	6.9	17.6	4.9	14.7	2.0	1.0
		50代	89	42.7	11.2	6.7	39.3	5.6	19.1	5.6	10.1	4.5	6.7
	女性	20代	106	30.2	32.1	10.4	47.2	4.7	20.8	2.8	4.7	7.5	1.9
		30代	103	26.2	26.2	2.9	51.5	4.9	32.0	2.9	8.7	4.9	4.9
		40代	93	26.9	22.6	4.3	53.8	0.0	17.2	4.3	8.6	6.5	5.4
		50代	91	33.0	28.6	12.1	38.5	2.2	17.6	2.2	11.0	8.8	5.5

本人が進路選択で重視したことについて、全体で見ると「自分のやりたいことを勉強できること」と回答した人の割合が42.0%と最も高い。次いで、「進学または就職に有利であること」36.2%、「就職のための資格がとれること」21.9%と続いている。

性別・年代別にみると、男性は「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が全ての年代で最も高い。女性は「自分のやりたいことを勉強できること」と回答した人の割合が全ての年代で最も高い。

図表 10-3 進路選択で重視したことと最終学歴 [性別・最終学歴]



※問 17-b にて男女の差異が大きかった上記 4 項目について抽出

男性については、どの学歴においても「進学または就職に有利であること」の割合が最も高い。
女性については、最終学歴が大学（文系）では「自分のやりたいことを勉強できる」の割合が 45.1%と最も高いが、大学（理系）では、「就職のための資格がとれること」が 43.9%と最も高い。
男女の差異では大学（理系）の「就職のための資格がとれること」とした割合が 25.4 ポイント差がある。

最終学歴が高校の男性以外はどの学歴においても「保護者の意向」の割合が最も低い。

問 18-a あなたが高校・高等専門学校への進学時、進路選択をした際に、ご両親が重視したことはどのようなことですか。(いくつでも)

※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

図表 11-1 両親が進路選択で重視したこと [性別・年代]

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	
		回答者数 (n)	進学または就職に有利であること	就職のための資格がとれること	就職の支援が行き届いていること	自分のやりたいことを勉強できること	部活動などの課外活動	学校の雰囲気	友人と通えること	経済的負担	その他	
全体		1,151	33.4	11.9	8.8	24.2	7.3	20.5	6.0	20.4	7.9	
性別	男性	568	40.3	13.0	12.0	22.5	9.2	17.1	6.9	18.1	7.0	
	女性	583	26.6	10.8	5.7	25.7	5.5	23.8	5.1	22.6	8.7	
年代	男性	20代	144	32.6	16.7	19.4	23.6	13.2	18.8	7.6	9.0	6.9
		30代	142	40.1	13.4	12.7	25.4	12.7	20.4	8.5	20.4	4.2
		40代	141	41.1	15.6	10.6	22.0	5.7	15.6	5.0	19.1	11.3
		50代	141	47.5	6.4	5.0	19.1	5.0	13.5	6.4	24.1	5.7
	女性	20代	145	23.4	14.5	10.3	37.9	7.6	25.5	4.1	15.2	6.2
		30代	146	22.6	11.6	4.8	31.5	9.6	31.5	6.2	20.5	4.8
		40代	147	29.3	10.9	3.4	21.8	2.0	16.3	4.8	21.8	13.6
		50代	145	31.0	6.2	4.1	11.7	2.8	22.1	5.5	33.1	10.3

両親が進路選択で重視したことについて、全体で見ると「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が33.4%と最も高い。次いで、「自分のやりたいことを勉強できること」24.2%、「学校の雰囲気」20.5%と続いている。

性別・年代別にみると、男性は「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が全ての年代で最も高い。女性は「自分のやりたいことを勉強できること」と回答した人の割合が20代で37.9%、30代で31.5%と高くなっている。40代の女性は「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が29.3%と最も高い。50代の女性は「経済的負担」が33.1%と最も高い。

問 18-b あなたが短期大学・専門学校・大学・大学院への進学時、進路選択をした際に、ご両親が重視していたことはどのようなことですか。(いくつでも)

※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

図表 11-2 両親が進路選択で重視したこと [性別・年代]

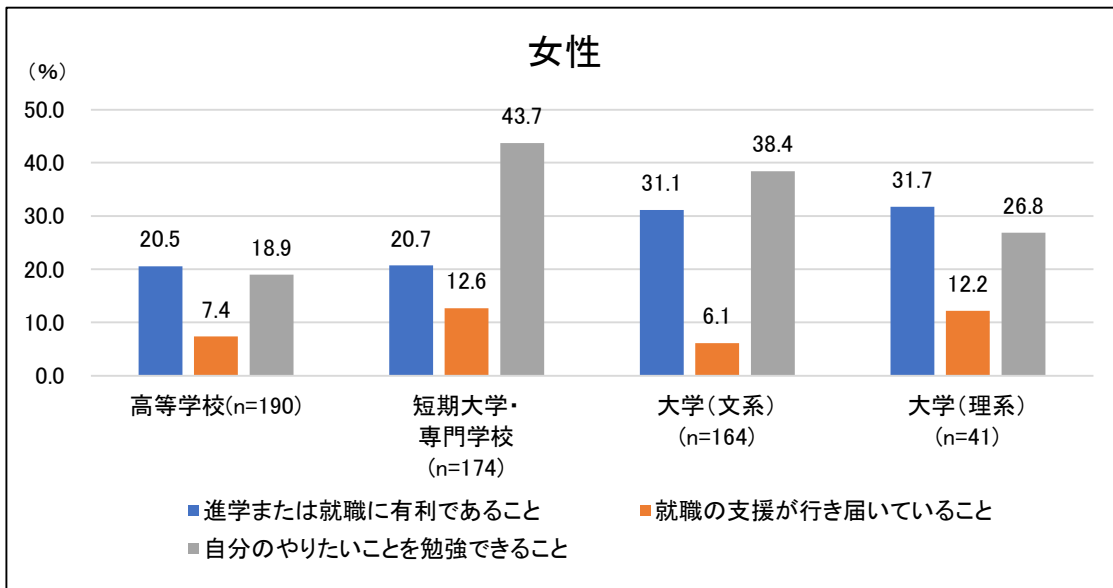
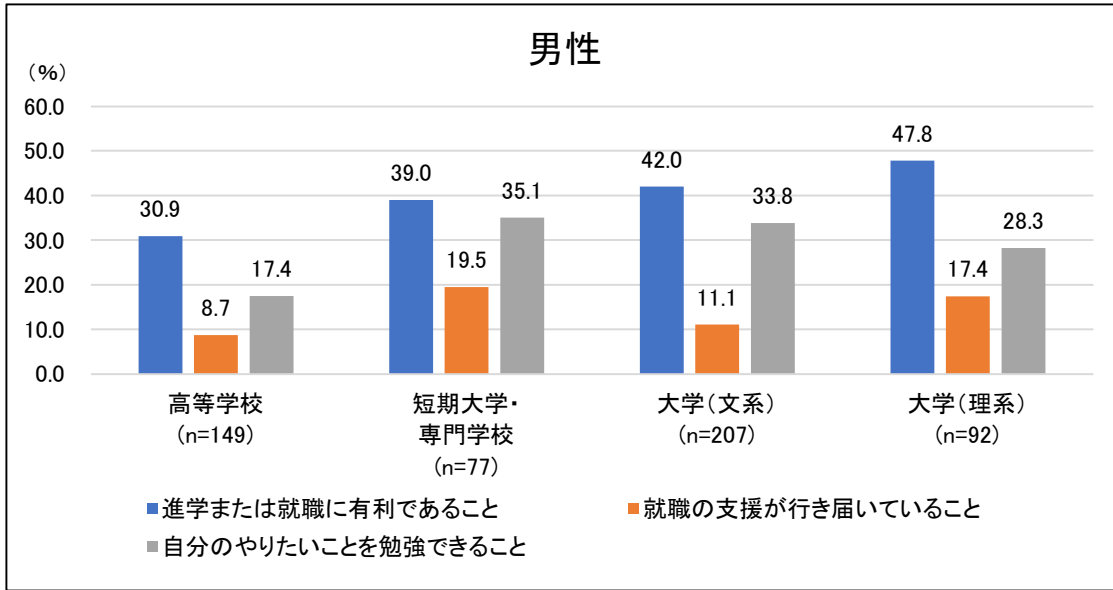
(%)

		回答者数(n)	1 進学または就職に有利であること	2 就職のための資格がとれること	3 就職の支援が行き届いていること	4 自分のやりたいことを勉強できること	5 部活動などの課外活動	6 学校の雰囲気	7 友人と通えること	8 経済的負担	9 その他	
全体		812	36.3	21.2	11.8	35.5	4.7	13.9	3.0	16.0	5.2	
性別	男性	419	44.6	20.5	13.8	31.5	6.4	12.9	2.9	16.0	4.5	
	女性	393	27.5	21.9	9.7	39.7	2.8	15.0	3.1	16.0	5.9	
年代	男性	20代	121	38.0	27.3	16.5	35.5	9.1	11.6	3.3	8.3	5.0
		30代	107	45.8	23.4	16.8	34.6	4.7	17.8	1.9	14.0	3.7
		40代	102	46.1	17.6	12.7	24.5	6.9	13.7	2.9	19.6	5.9
		50代	89	50.6	11.2	7.9	30.3	4.5	7.9	3.4	24.7	3.4
	女性	20代	106	24.5	24.5	12.3	48.1	5.7	16.0	4.7	8.5	4.7
		30代	103	29.1	26.2	9.7	39.8	2.9	17.5	1.0	18.4	3.9
		40代	93	29.0	20.4	8.6	36.6	1.1	10.8	3.2	18.3	7.5
		50代	91	27.5	15.4	7.7	33.0	1.1	15.4	3.3	19.8	7.7

両親が進路選択で重視したことについて、全体で見ると「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が36.3%と最も高い。次いで、「自分のやりたいことを勉強できること」35.5%、「就職のための資格がとれること」21.2%と続いている。

性別・年代別にみると、男性は「進学または就職に有利であること」と回答した人の割合が全ての年代で最も高い。女性は「自分のやりたいことを勉強できること」と回答した人の割合が全ての年代で最も高い。

図表 11-3 両親が進路選択で重視したことと最終学歴 [性別・最終学歴]



※問 18-b にて男女の差異が大きかった上記 3 項目について抽出

両親が進路選択の際に重視することとして「進学または就職に有利であること」を挙げた人の割合は同学歴の男女で比較するといずれも男性の方が高く、特に大学（理系）では男女で 16.1 ポイントの差がある。女性では、短期大学・専門学校や大学（文系）では「進学または就職に有利であること」より「自分のやりたいことを勉強できること」の方が割合が高くなっている。

問 19-a 自分の高校・高等専門学校への進学時の進路選択において、誰(何)の影響が大きかったと感じていますか。(3つまで)

※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

図表 12-1 進路選択の影響 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	7	8	
			父親	母親	親以外の家族・親族	友人や先輩	学校や塾、習い事の先生	学校などでの職業体験、アルバイトなど	本、テレビ、インターネット等で知った情報	その他	
全体		1,151	23.8	37.9	9.7	21.7	20.2	4.8	8.3	10.1	
性別	男性	568	29.8	35.7	9.5	22.4	20.2	5.5	8.8	9.7	
	女性	583	18.0	40.0	9.9	21.1	20.1	4.1	7.7	10.5	
年代	男性	20代	144	32.6	41.7	12.5	20.1	13.2	6.9	8.3	8.3
		30代	142	29.6	38.0	7.0	24.6	23.9	7.0	13.4	5.6
		40代	141	28.4	38.3	9.9	19.9	18.4	5.0	7.8	12.1
		50代	141	28.4	24.8	8.5	24.8	25.5	2.8	5.7	12.8
	女性	20代	145	25.5	46.9	7.6	13.8	19.3	9.0	6.9	9.0
		30代	146	14.4	46.6	13.0	22.6	20.5	0.7	6.8	8.9
		40代	147	15.0	30.6	8.8	21.1	18.4	5.4	12.9	12.9
		50代	145	17.2	35.9	10.3	26.9	22.1	1.4	4.1	11.0

自分の高校・高等専門学校への進学時の進路選択において影響を与えた人・ものについて、全体で見ると「母親」と回答した人の割合が最も高く、37.9%であった。次いで、「父親」23.8%、「友人や先輩」21.7%と続いている。

性別・年代別で見ると、男性の20代～40代は「母親」と回答した人の割合が最も高い。男性の50代は「父親」と回答した人の割合が、28.4%と最も高い。女性は全ての年代で「母親」と回答した人の割合が最も高い。「父親」と回答した人の割合は、男性が29.8%、女性が18.0%と11.8ポイント差であった。

問 19-b 自分の短期大学・専門学校・大学・大学院への進学時の進路選択において、誰(何)の影響が大きかったと感じていますか。(3つまで)

※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

図表 12-2 進路選択の影響 [性別・年代]

(%)

		回答者数(n)	1	2	3	4	5	6	7	8	
			父親	母親	親以外の家族・親族	友人や先輩	学校や塾、習い事の先生	アルバイトなど 学校などでの職業体験、	本、テレビ、インターネット 等で知った情報	その他	
全体		812	24.1	36.7	6.3	20.3	19.5	6.8	14.4	10.2	
性別	男性	419	28.4	32.7	6.4	21.7	19.3	9.1	14.3	8.8	
	女性	393	19.6	41.0	6.1	18.8	19.6	4.3	14.5	11.7	
年代	男性	20代	121	34.7	43.0	8.3	12.4	15.7	9.1	12.4	5.8
		30代	107	26.2	29.9	5.6	29.9	15.9	7.5	20.6	7.5
		40代	102	27.5	31.4	5.9	25.5	23.5	12.7	7.8	7.8
		50代	89	23.6	23.6	5.6	20.2	23.6	6.7	16.9	15.7
	女性	20代	106	25.5	47.2	3.8	16.0	21.7	8.5	14.2	7.5
		30代	103	17.5	46.6	4.9	21.4	23.3	1.0	15.5	7.8
		40代	93	17.2	35.5	9.7	21.5	15.1	7.5	14.0	9.7
		50代	91	17.6	33.0	6.6	16.5	17.6	0.0	14.3	23.1

自分の短期大学・専門学校・大学・大学院の進路選択において影響を与えた人・ものについて、全体で見ると「母親」と回答した人の割合が最も高く、36.7%であった。次いで、「父親」24.1%、「友人や先輩」20.3%と続いている。

「母親」と回答した人の割合については、全ての性別・年代別で最も高い。ただし、男性50代については、「母親」と並び、「父親」、「学校や塾、習い事の先生」が同率で最も高くなっている。

問 19-c 自分の就職時の職業選択において、誰(何)の影響が大きかったと感じていますか。(3つまで)

※社会人になった後に再度進学された方は、社会人になる前の学生時代のことについてご回答ください。

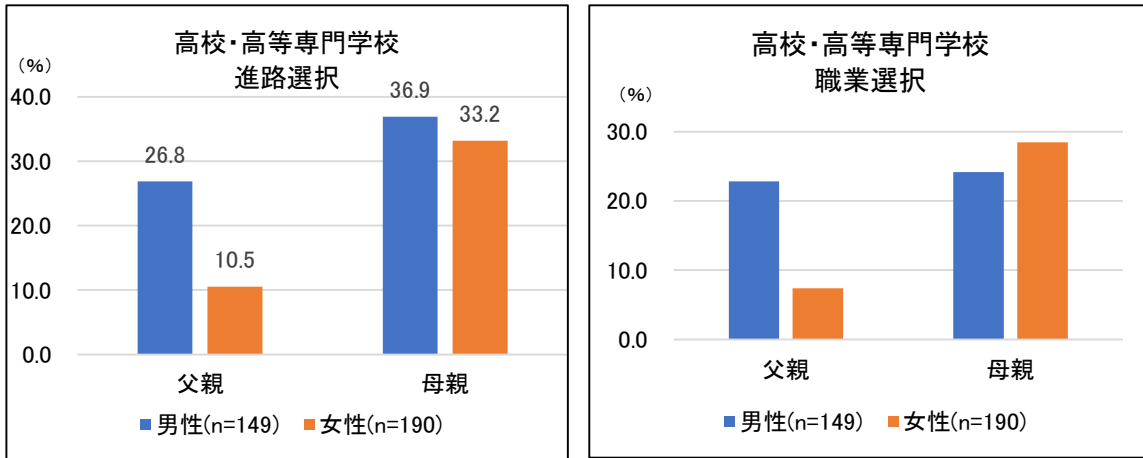
図表 12-3 就職選択の影響 [性別・年代]

		回答者数(n)	(%)									
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	
			父親	母親	親以外の家族・親族	友人や先輩	学校や塾、習い事の先生	アルバイトなど	学校などでの職業体験、 アルバイトなど	本、テレビ、インターネット 等で知った情報	その他	就職したことはない
全体		1,200	18.4	26.0	6.6	20.1	9.8	12.6	15.5	11.0	7.0	
性別	男性	600	23.0	22.7	7.7	23.0	8.8	12.0	17.5	10.2	6.0	
	女性	600	13.8	29.3	5.5	17.2	10.8	13.2	13.5	11.8	8.0	
年代	男性	20代	150	28.7	28.7	7.3	12.7	6.7	14.7	16.7	4.0	11.3
		30代	150	20.0	24.7	8.0	27.3	10.7	12.0	20.7	8.7	6.0
		40代	150	24.7	20.7	8.7	24.0	8.0	11.3	16.0	13.3	4.7
		50代	150	18.7	16.7	6.7	28.0	10.0	10.0	16.7	14.7	2.0
	女性	20代	150	16.0	36.0	2.7	16.0	9.3	15.3	12.0	6.0	13.3
		30代	150	14.0	33.3	4.7	15.3	10.7	13.3	14.7	11.3	7.3
		40代	150	10.7	24.0	7.3	18.7	8.7	12.7	18.7	12.0	8.0
		50代	150	14.7	24.0	7.3	18.7	14.7	11.3	8.7	18.0	3.3

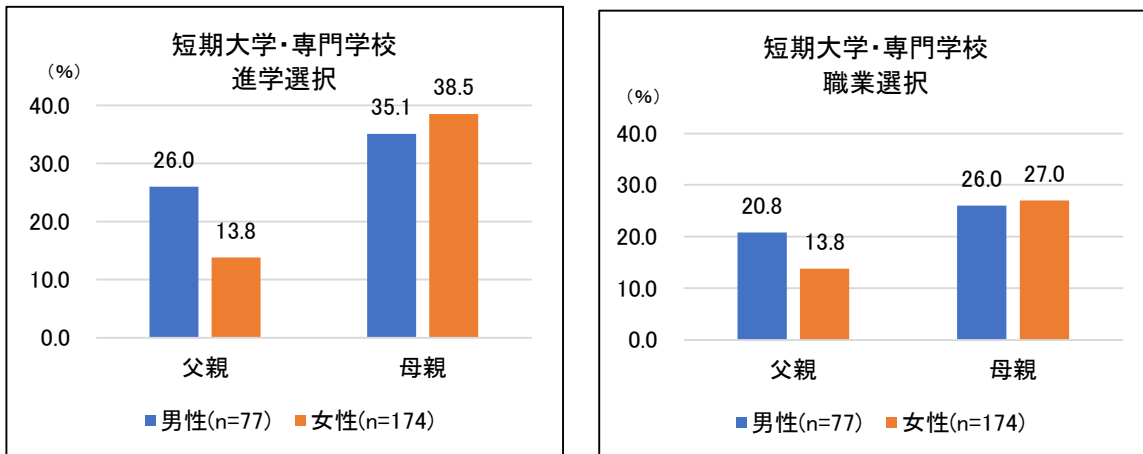
自分の就職時の進路選択において、影響を与えた人・ものについて、全体で見ると「母親」と回答した人の割合が最も高く、26.0%であった。次いで、「友人や先輩」20.1%、「父親」18.4%と続いている。「母親」と「父親」の割合は7.6ポイントの差がある。

性別・年代別で見ると、女性は全ての年代で「母親」と回答した人の割合が最も高い。男性は20代のみ「母親」と回答した人の割合が28.7%と「父親」と同率で最も高い結果となっている。30代・50代は「友人や先輩」がそれぞれ27.3%、28.0%と最も高い。40代は「父親」が24.7%で最も高い結果となった。

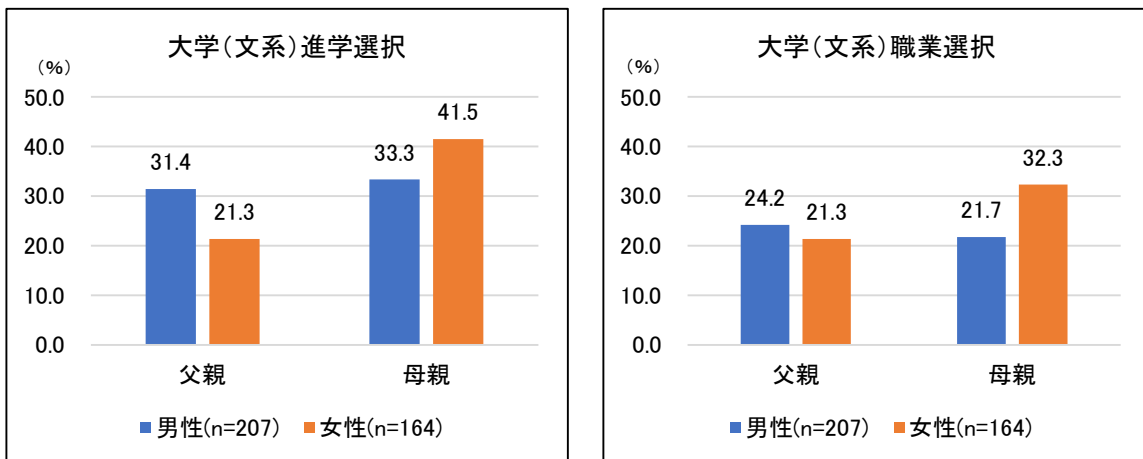
図表 12-4 最終学歴が高校・高等専門学校である場合における父母の影響 [性別・最終学歴]



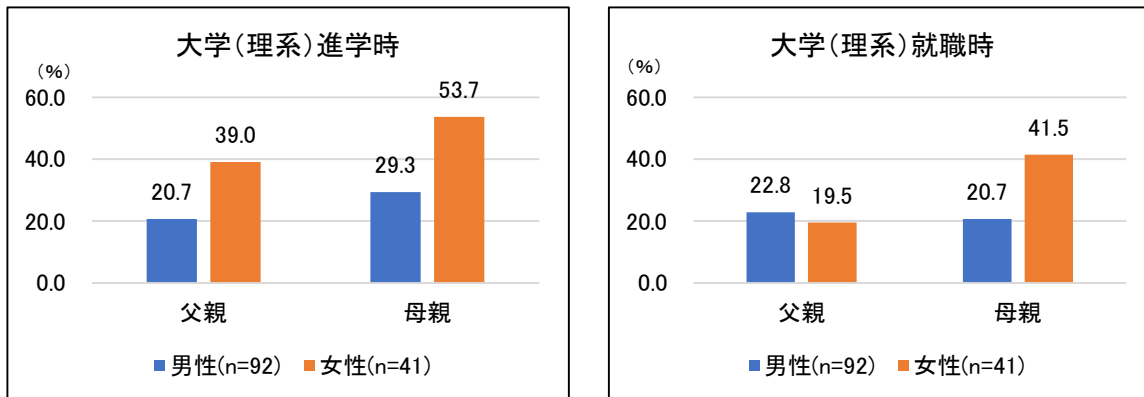
図表 12-5 最終学歴が短大・専門学校である場合における父母の影響 [性別・最終学歴]



図表 12-6 最終学歴が大学(文系)における父母の影響 [性別・最終学歴]



図表 12-7 最終学歴が大学(理系)における父母の影響 [性別・最終学歴]

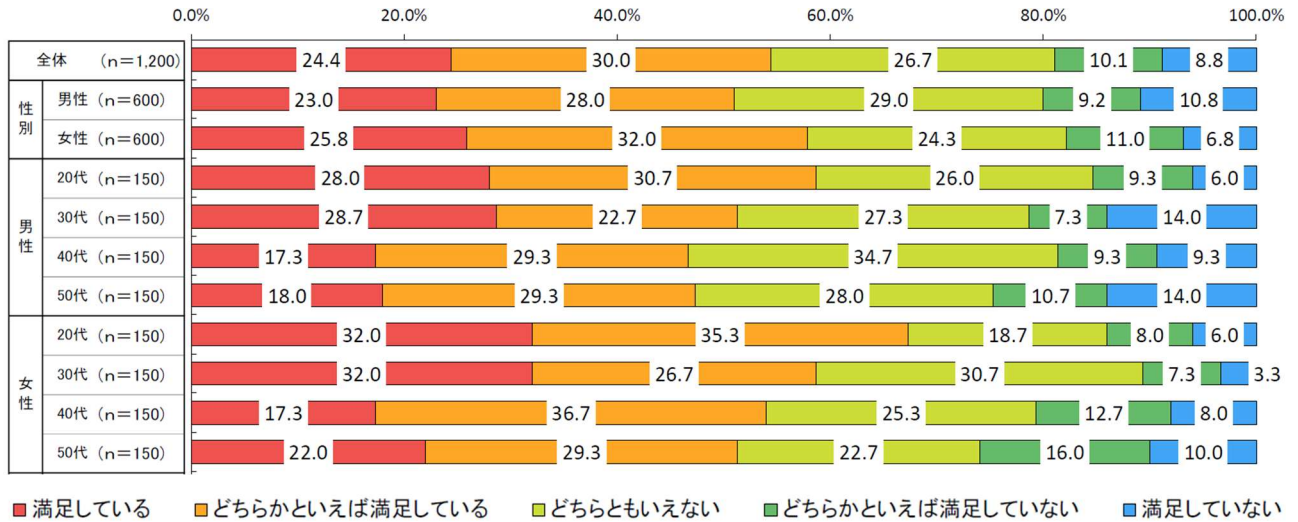


どのような進路選択の場合でも男女ともに父親よりも母親の影響を受けたとする人の割合の方が高い。

職業選択の場面においては、女性はそのような職業選択の場面でも母親の影響を受けたとする人の割合の方が高いが、男性においては、短大・専門学校・大学以外では母親より父親の影響を受けたとする人の割合の方が高くなる。

問 20 あなたは、自分の最終学歴となる学校の選択について満足していますか。
 ※現在学生の方は、今在学している学校の選択について教えてください。

図表 13-1 進路選択の満足度 [性別・年代]

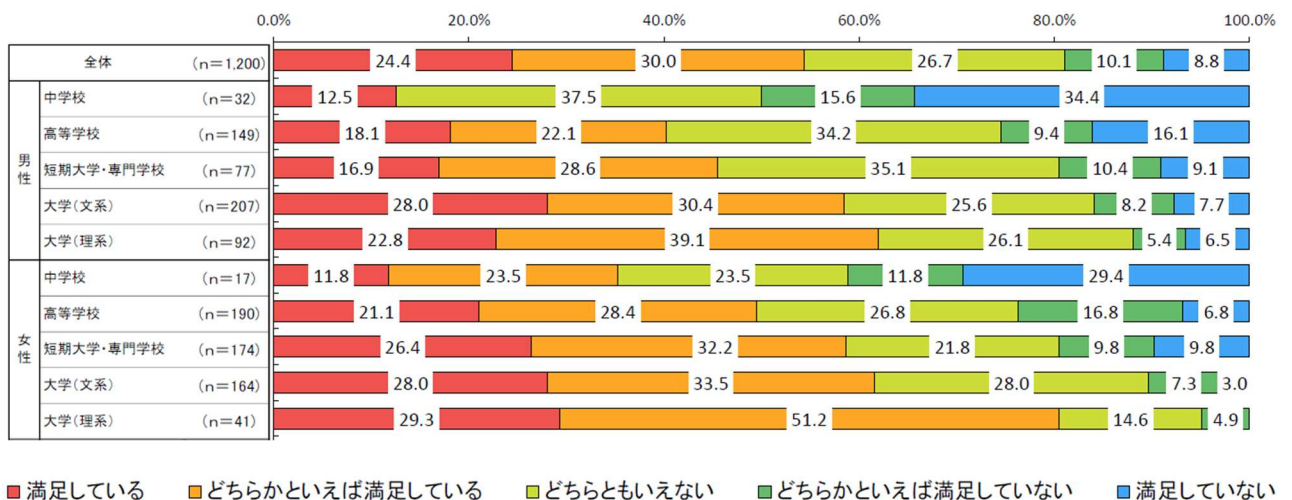


進路選択の満足度について全体でみると、「満足している(「どちらかといえば満足している」+「満足している」)」と回答した人の割合は、54.4%と最も高い。次いで、「どちらともいえない」26.7%、「満足していない(「どちらかといえば満足していない」+「満足していない」)」18.9%と続いている。

性別でみると、「満足している(「どちらかといえば満足している」+「満足している」)」と回答した人の割合は、男性で51.0%、女性で57.8%と、女性の方が男性よりも6.8ポイント高い。

年代別でみると、年代が若くなるほど満足度が高い傾向があり、男性は50代で47.3%、20代で58.7%と11.4ポイント差があった。女性は50代で51.3%、20代で67.3%と16.0ポイント差があった。

図表 13-2 進路選択の満足度と最終学歴 [性別・最終学歴]



※大学院は参考値のためグラフからは除外

男女ともに大卒である場合は、「満足している(「どちらかといえば満足している」+「満足している」)」と回答した人の割合は 5 割を超えている。女性では、短期大学・専門学校である場合、「満足している(「どちらかといえば満足している」+「満足している」)」が 58.6%と5割を超えるが、男性は 45.5%と5割に満たない。

問 21 問 20 で満足していないと答えた理由を教えてください。(3つまで)

図表 14-1 進路選択に満足していない理由 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1 より就職に有利な学校に通いたかった	2 自分の好きな学校・学科に通いたかった	3 地元から離れた学校に通いたかった	4 さらに進学したかった	5 もっと早く就職したかった	6 その他	
全体		227	35.2	30.0	8.4	30.8	11.5	4.8	
性別	男性	120	33.3	30.8	9.2	30.0	15.8	3.3	
	女性	107	37.4	29.0	7.5	31.8	6.5	6.5	
年代	男性	20代	23	47.8	17.4	8.7	21.7	30.4	0.0
		30代	32	21.9	28.1	21.9	31.3	21.9	3.1
		40代	28	35.7	39.3	3.6	32.1	7.1	7.1
		50代	37	32.4	35.1	2.7	32.4	8.1	2.7
	女性	20代	21	38.1	23.8	14.3	28.6	23.8	19.0
		30代	16	50.0	25.0	6.3	31.3	0.0	6.3
		40代	31	35.5	29.0	9.7	29.0	6.5	3.2
		50代	39	33.3	33.3	2.6	35.9	0.0	2.6

進路選択に満足していない理由を全体で見ると、「より就職に有利な学校に通いたかった」と回答した人の割合が、35.2%と最も高かった。次いで、「さらに進学したかった」が 30.8%、「自分の好きな学校・学科に通いたかった」が 30.0%と続いている。

性別・年代別にみると、女性の 20代～40代は「より就職に有利な学校に通いたかった」と回答した人の割合が最も高い。女性の 50代は「さらに進学したかった」と回答した人の割合が、35.9%と最も高い。

問 22 あなたが望む進路選択ができなかった理由を教えてください。(3つまで)

図表 15-1 希望の進路選択ができなかった理由 [性別・年代]

		回答者数 (n)	1 自分の学力が足りなかったから	2 経済力が十分でなかったから	3 家族が進学先(学校・学科)について反対したから	4 (例)「女は短期大学か女子大学に行くべき」など 家族が性別を理由に反対したから	5 希望する進路が実家から遠かったから	6 あきらめざるをえなかったから 家族の事情(介護・看護等)で	7 その他	
全体		227	58.6	29.1	8.8	2.2	7.0	7.0	11.5	
性別	男性	120	65.0	25.0	8.3	0.0	8.3	5.8	9.2	
	女性	107	51.4	33.6	9.3	4.7	5.6	8.4	14.0	
年代	男性	20代	23	47.8	21.7	13.0	0.0	21.7	13.0	0.0
		30代	32	56.3	18.8	12.5	0.0	9.4	6.3	12.5
		40代	28	85.7	28.6	7.1	0.0	7.1	3.6	3.6
		50代	37	67.6	29.7	2.7	0.0	0.0	2.7	16.2
	女性	20代	21	42.9	28.6	9.5	0.0	9.5	9.5	28.6
		30代	16	50.0	31.3	6.3	0.0	6.3	6.3	18.8
		40代	31	58.1	29.0	6.5	3.2	6.5	6.5	9.7
		50代	39	51.3	41.0	12.8	10.3	2.6	10.3	7.7

希望の進路選択ができなかった理由として全体でみると、「自分の学力が足りなかったから」と回答した人の割合が 58.6%と最も高く、次いで、「経済力が十分でなかったから」が 29.1%と続いている。

全ての年代・性別で、最も割合が高いのが「自分の学力が足りなかったから」、次いで「経済力が十分でなかったから」との結果になっている。「経済力が十分ではなかったから」と回答した人の割合が高い年代は男女ともに 50代であり、女性の 50代で 41.0%、男性の 50代で 29.7%と、11.3ポイント差があった。

「家族が性別を理由に反対したから」は 40代、50代女性以外は 0%となっており、特に 50代女性は約 1割が理由として挙げた。

4. 社会人の学習活動について

問 23 あなたは学校を卒業して以降、余暇等を利用して積極的に何かを学ぶ機会がありましたか。また、どのようなことについて学んだかも教えてください。

※本やインターネットを利用して自主的に学んだ場合も含まれます。

図表 16-1 学びの機会 [性別・年代]

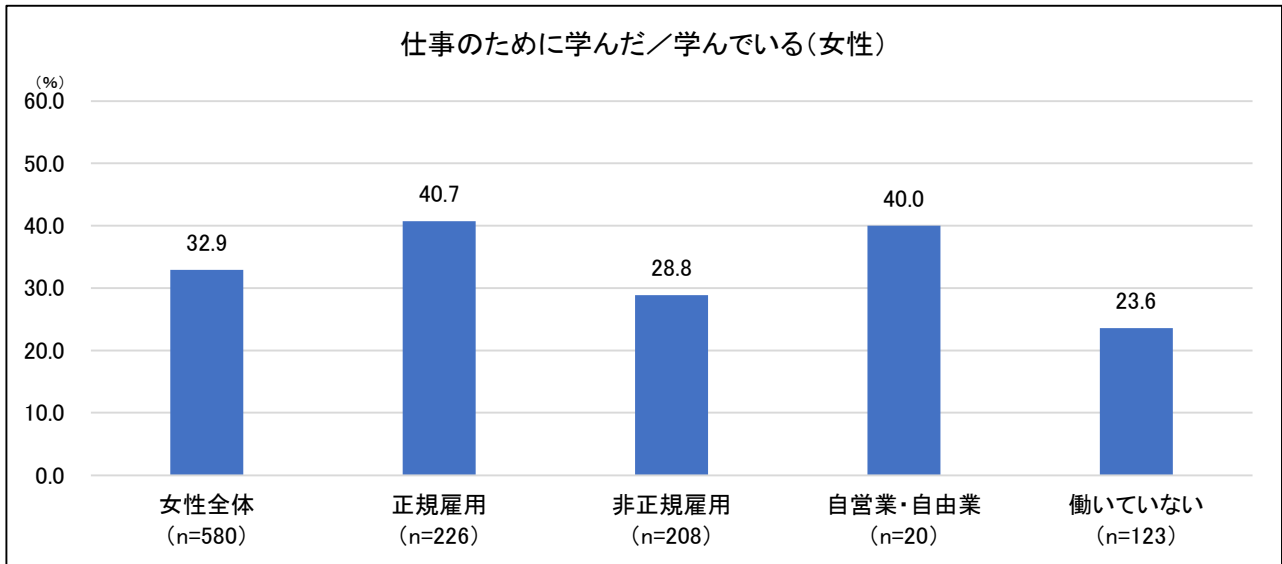
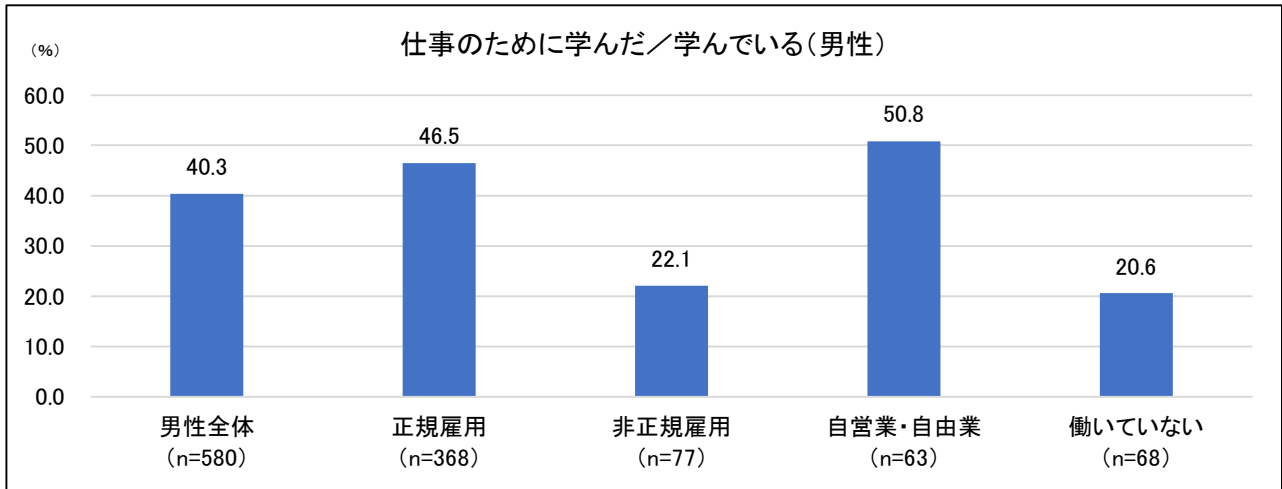
(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	
			仕事のために学んだ/学んでいる	家庭(家事・育児・介護・家計管理など)のために学んだ/学んでいる	地域活動や社会貢献活動のために学んだ/学んでいる	自分の趣味や興味・関心のために学んだ/学んでいる	その他のことを学んだ/学んでいる	学ぶ機会はなかった	
全体		1,160	36.6	11.6	5.5	29.1	6.5	33.2	
性別	男性	580	40.3	12.4	8.6	27.9	7.6	30.2	
	女性	580	32.9	10.7	2.4	30.3	5.3	36.2	
年代	男性	20代	131	41.2	19.1	19.1	27.5	7.6	18.3
		30代	149	42.3	15.4	7.4	31.5	8.1	31.5
		40代	150	39.3	9.3	6.7	31.3	4.0	32.0
		50代	150	38.7	6.7	2.7	21.3	10.7	37.3
	女性	20代	133	36.8	16.5	4.5	33.1	5.3	28.6
		30代	149	33.6	12.8	1.3	28.2	7.4	32.2
		40代	148	28.4	6.1	2.0	29.1	3.4	43.2
		50代	150	33.3	8.0	2.0	31.3	5.3	40.0

学校を卒業して以降、積極的に何かを学んだ経験はあるか・どのように学んだかについて、全体で見ると、「仕事のために学んだ/学んでいる」と回答した人の割合が 36.6%と最も高く、次いで「学ぶ機会がなかった」が 33.2%、「自分の趣味や興味・関心のために学んだ/学んでいる」が 29.1%と続いている。

性別・年代別にみると、男性は全ての年代で「仕事のために学んだ/学んでいる」と回答した人の割合が最も高く、女性は20代と30代で「仕事のために学んだ/学んでいる」が最も高い。女性の40代と50代は、「学ぶ機会がなかった」と回答した人の割合が最も高い。

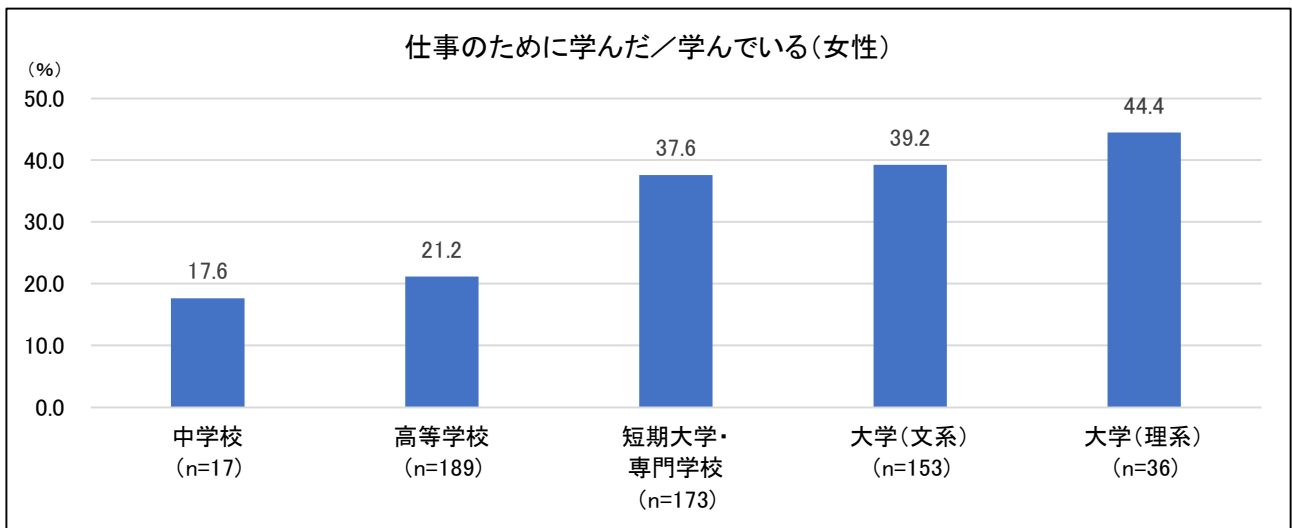
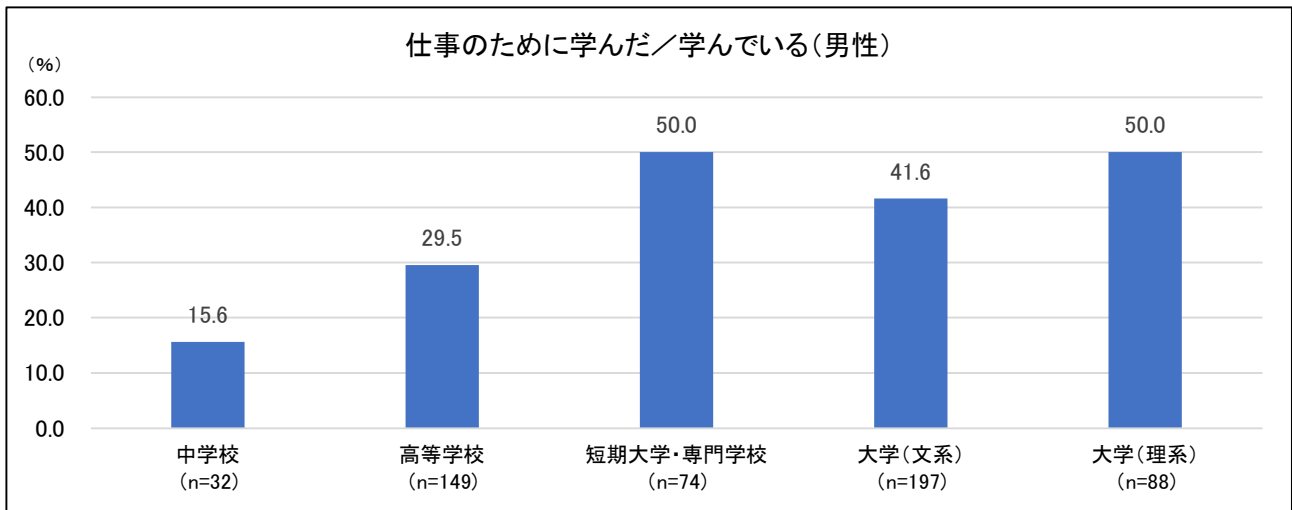
図表 16-2 学びの機会と就業状況 [性別・就業状況]



※女性の自営業・自由業は参考値に満たないが(n=20)、男性の同項目との比較のため掲載

「正規雇用」と「自営業・自由業」である場合は、男女ともに「学んだ／学んでいる」とする割合が相対的に高く、いずれも男性の方が割合が高い。性別で比較すると、男性の方がそれぞれ割合が高い。非正規雇用である場合は、女性が28.8%、男性は22.1%と、女性が高くなっている。

図表 16-3 学びの機会と最終学歴 [性別・最終学歴]



※最終学歴が中学校である女性は参考値に満たないが(n=17)、男性の同項目との比較のため掲載

最終学歴が中学校、高校の場合は相対的に「仕事のために学んだ/学んでいる」と回答した人の割合が低い。性別で比較した場合どの学歴も、男性の方が「仕事のために学んだ/学んでいる」と回答した人の割合が高くなっている。

問 24 あなたが仕事のために学んだ／学んでいる主な理由を教えてください。(3つまで)

※本やインターネットを利用して自主的に学んだ場合も含まれます。

図表 17-1 仕事に関連した学びの理由 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1 仕事に必要な知識・技術を学んだ／学んでいる	2 仕事に必要な資格取得のために学んだ／学んでいる	3 昇進・昇格に備えて学んだ／学んでいる	4 転職のために必要なことを学んだ／学んでいる	5 独立のために必要なことを学んだ／学んでいる	6 再就職のために必要なことを学んだ／学んでいる	7 その他	
全体		425	76.0	50.4	17.2	16.7	7.8	4.5	0.9	
性別	男性	234	77.4	51.7	21.8	15.8	9.0	5.1	0.4	
	女性	191	74.3	48.7	11.5	17.8	6.3	3.7	1.6	
年代	男性	20代	54	75.9	42.6	24.1	20.4	9.3	0.0	1.9
		30代	63	73.0	65.1	27.0	15.9	11.1	4.8	0.0
		40代	59	79.7	44.1	18.6	16.9	10.2	13.6	0.0
		50代	58	81.0	53.4	17.2	10.3	5.2	1.7	0.0
	女性	20代	49	79.6	44.9	16.3	14.3	8.2	0.0	2.0
		30代	50	68.0	48.0	10.0	18.0	8.0	4.0	0.0
		40代	42	71.4	52.4	11.9	28.6	2.4	7.1	0.0
		50代	50	78.0	50.0	8.0	12.0	6.0	4.0	4.0

仕事のために学んだ／学んでいる主な理由について、全体で見ると、「仕事に必要な知識・技術を学んだ／学んでいる」と回答した人の割合が 76.0%と最も高く、次いで「仕事に必要な資格取得のために学んだ／学んでいる」が 50.4%、「昇進・昇格に備えて学んだ／学んでいる」が 17.2%と続いている。

全ての年代・性別で、最も割合が高いのが「仕事に必要な知識・技術を学んだ／学んでいる」、次いで「仕事に必要な資格取得のために学んだ／学んでいる」と続いている。

3番目に多い回答として、男性は全ての年代で「昇進・昇格に備えて学んだ／学んでいる」としているが、女性は20代のみ「昇進・昇格に備えて学んだ／学んでいる」としている。女性の30代～50代で3番目に多い回答は、「転職のために必要なことを学んだ／学んでいる」である。

図表 17-2 仕事に関連した学びの理由と就業状況 [性別・就業状況]

(%)

		回答者数 (n)	1 仕事に必要な知識・技術を 学んだ／学んでいる	2 仕事に必要な資格取得の ために学んだ／学んでいる	3 昇進・昇格に備えて学んだ／ 学んでいる	4 転職のために必要なことを学 んだ／学んでいる	5 独立のために必要なことを学 んだ／学んでいる	6 再就職のために必要なことを 学んだ／学んでいる	7 その他	
就業 状況	男性	正規雇用	171	78.4	50.9	25.1	12.9	6.4	4.1	0.6
		非正規雇用	17	70.6	58.8	23.5	35.3	5.9	5.9	0.0
		自営業・自由業	32	78.1	43.8	3.1	21.9	28.1	9.4	0.0
		働いていない	14	71.4	71.4	21.4	14.3	0.0	7.1	0.0
	女性	正規雇用	92	76.1	52.2	16.3	17.4	4.3	1.1	2.2
		非正規雇用	60	66.7	43.3	6.7	15.0	10.0	6.7	1.7
		自営業・自由業	8	75.0	25.0	0.0	25.0	12.5	0.0	0.0
		働いていない	29	86.2	51.7	10.3	20.7	3.4	3.4	0.0

※上記以外のその他の仕事は参考値のため表からは削除

正規雇用の場合、男性は「昇進・昇格に備えて学んだ/学んでいる」が 25.1%であるのに対し、女性は 16.3%であり、8.8ポイントの差がある。「昇進・昇格に備えて学んだ/学んでいる」とした女性の正規雇用では、16.3%であるのに対し、非正規雇用では 6.7%と 9.6ポイントの差がある。「仕事に必要な知識・技術を学んだ/学んでいる」とした女性の正規雇用では、76.1%であるのに対し、非正規雇用では 66.7%と 9.4ポイントの差がある。

問 25 問 23 で「1.仕事のために学んだ／学んでいる」と回答した人に伺います。

あなたは仕事のためにどのような方法で学びましたか／学んでいますか。(いくつでも)

図表 18-1 仕事に関連した学びの方法 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1 本やインターネットを利用して	2 テレビやラジオの講座を利用して	3 ウェブ上の学習サービスを利用して	4 通信教育の講座を利用して	5 民間の講座・教室等を利用して	6 大学や各種学校での公開講座を利用して	7 大学・大学院等に入学して(社会人コースを含む)	8 自治体や公共施設が提供する講座・教室を利用して	9 その他	
全体		425	66.1	13.4	24.0	20.7	24.7	10.1	4.9	5.9	2.1	
性別	男性	234	70.9	17.5	30.8	17.9	25.6	11.1	5.1	6.0	1.7	
	女性	191	60.2	8.4	15.7	24.1	23.6	8.9	4.7	5.8	2.6	
年代	男性	20代	54	66.7	18.5	37.0	22.2	13.0	16.7	11.1	3.7	0.0
		30代	63	73.0	22.2	38.1	17.5	28.6	19.0	3.2	6.3	1.6
		40代	59	79.7	18.6	30.5	15.3	25.4	5.1	5.1	8.5	0.0
		50代	58	63.8	10.3	17.2	17.2	34.5	3.4	1.7	5.2	5.2
	女性	20代	49	63.3	10.2	24.5	16.3	16.3	20.4	6.1	4.1	4.1
		30代	50	66.0	0.0	14.0	18.0	14.0	6.0	2.0	8.0	4.0
		40代	42	57.1	11.9	16.7	38.1	31.0	2.4	4.8	2.4	0.0
		50代	50	54.0	12.0	8.0	26.0	34.0	6.0	6.0	8.0	2.0

仕事に関連してどのような方法で学んだか/学んでいるかについて、「本やインターネットを利用して」と回答した人の割合が66.1%と最も高く、次いで「民間の講座・教室等を利用して」が24.7%、ウェブ上の学習サービスを利用して」が24.0%と続いている。

全ての年代・性別で、最も割合が高いのが「本やインターネットを利用して」となっている。「本やインターネットを利用して」、「テレビやラジオの講座を利用して」、「ウェブ上の学習サービスを利用して」では、性別による差異が10ポイント以上ある。特に、30代の男女差が大きい。

(%)

問 26 あなたが仕事のためにより充実した学習活動をするために必要なことはなんですか。

※現在学んでいる場合は、もっと学ぶために主に必要なことを回答してください。

※現在学んでいない場合は、学び始めるために主に必要なことを回答してください。

※現在働いていない場合は、今後働くときに必要だと考えることを回答してください。

図表 19-1 仕事に関連した学習の充実のために必要なこと [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1 仕事にかかる負担が少なくなる こと	2 家事・育児・介護などにかかる負 担が少なくなること	3 経済的な支援があること	4 適当な学習の場が近くにあること	5 参加しやすい時間帯に学習する機 会や教室等が開催されること	6 学習する機会や教室等の情報が得 られること	7 学習が仕事やキャリアに活かせること	8 キャリアに対するモチベーションが高ま ること	9 その他	10 学習活動の必要性を感じていない	
全体		1,200	22.8	14.0	27.9	16.0	20.8	11.7	28.5	19.9	0.2	23.0	
性別	男性	600	27.0	11.7	29.0	15.5	18.0	12.3	29.7	21.7	0.2	21.7	
	女性	600	18.7	16.3	26.8	16.5	23.5	11.0	27.3	18.2	0.2	24.3	
年代	男性	20代	150	24.7	14.7	22.7	15.3	18.0	16.0	26.0	24.7	0.0	18.0
		30代	150	33.3	13.3	30.7	14.0	22.7	12.0	30.0	24.7	0.0	20.0
		40代	150	31.3	14.0	24.0	16.0	13.3	10.7	29.3	20.7	0.7	24.7
		50代	150	18.7	4.7	38.7	16.7	18.0	10.7	33.3	16.7	0.0	24.0
	女性	20代	150	27.3	14.7	24.7	13.3	16.0	12.0	26.7	25.3	0.0	22.7
		30代	150	18.0	21.3	24.0	15.3	20.0	14.0	29.3	16.0	0.0	27.3
		40代	150	15.3	14.0	31.3	19.3	27.3	10.0	24.0	18.0	0.0	25.3
		50代	150	14.0	15.3	27.3	18.0	30.7	8.0	29.3	13.3	0.7	22.0

仕事に関連した学習の充実のために必要なこととして全体で見ると、「学習が仕事やキャリアに活かせる」と回答した人の割合が28.5%と最も高く、どの性別・年代でも回答された。次いで「経済的な支援があること」が27.9%、「仕事にかかる負担が少なくなること」が22.8%であった。

性別・年代別にみると、「仕事にかかる負担が少なくなること」と回答した人の割合が、男性の30代で33.3%、女性の30代で18.0%と、男性の30代の方が女性の30代より15.3ポイント高い結果となった。他の性別・年代と比べ、50代男性においては「経済的な支援があること」が最も高く38.7%であった。

男女の差異では、「仕事にかかる負担が少なくなること」が8.3ポイント男性が高く、「参加しやすい時間帯に学習の機会や教室等が開催されること」が5.5ポイント、「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」が4.6ポイント女性が高かった。

図表 19-2 仕事に関連した学習の充実のために必要なことと末子の就学状況 [性別・末子の就学状況]

(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			仕事にかかる負担が少なくなること	家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること	経済的な支援があること	適当な学習の場が近くにあること	参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること	学習する機会や教室等の情報が得られること	学習が仕事やキャリアに活かせること	キャリアに対するモチベーションが高まること	その他	学習活動の必要性を感じていない	
末子の就学状況	男性	未就学児	58	37.9	32.8	29.3	20.7	20.7	20.7	29.3	15.5	0.0	10.3
		小学生	56	28.6	25.0	28.6	23.2	21.4	14.3	32.1	33.9	0.0	8.9
		中学生	20	25.0	0.0	20.0	10.0	10.0	20.0	30.0	15.0	0.0	30.0
		高校生・高等専門学生	21	9.5	0.0	61.9	23.8	19.0	14.3	38.1	14.3	0.0	23.8
		短期大学生、専門学校生、大学生・大学院生	13	0.0	15.4	23.1	30.8	7.7	7.7	15.4	23.1	0.0	30.8
		上記以外	25	20.0	4.0	32.0	20.0	16.0	4.0	36.0	28.0	0.0	12.0
	女性	未就学児	81	18.5	32.1	19.8	14.8	24.7	13.6	24.7	22.2	0.0	19.8
		小学生	47	14.9	29.8	17.0	21.3	21.3	8.5	21.3	17.0	0.0	21.3
		中学生	13	23.1	46.2	23.1	23.1	23.1	0.0	46.2	30.8	0.0	7.7
		高校生・高等専門学生	26	19.2	15.4	30.8	15.4	19.2	3.8	15.4	11.5	0.0	38.5
		短期大学生、専門学校生、大学生・大学院生	26	11.5	23.1	26.9	23.1	46.2	23.1	23.1	26.9	0.0	3.8
		上記以外	57	12.3	21.1	31.6	12.3	28.1	8.8	24.6	7.0	0.0	26.3

最も小さい子どもが「未就学児」、「小学生」である男性は、「学習活動の必要性を感じていない」とする人の割合が全体と比較して低い。最も小さい子どもが「未就学児」である男性が最も必要とすることが「仕事にかかる負担が少なくなること」(37.9%)、次いで「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」(32.8%)となっている。

最も小さい子どもが「未就学児」、「小学生」である女性は、「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」と回答した人の割合が高い。

図表 19-3 仕事に関連した学習の充実のために必要なことと就業状況 [性別・就業状況]

(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			仕事にかかる負担が少なくなること	家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること	経済的な支援があること	適当な学習の場が近くにあること	参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること	学習する機会や教室等の情報が得られること	学習が仕事やキャリアに活かせること	キャリアに対するモチベーションが高まること	その他	学習活動の必要性を感じていない	
全体		1,200	22.8	14.0	27.9	16.0	20.8	11.7	28.5	19.9	0.2	23.0	
就業状況	男性	正規雇用	368	27.4	14.4	30.2	15.5	19.6	14.9	31.8	23.4	0.0	17.9
		非正規雇用	77	35.1	5.2	31.2	18.2	9.1	6.5	23.4	26.0	0.0	22.1
		自営業・自由業	63	27.0	4.8	27.0	19.0	25.4	12.7	36.5	15.9	0.0	15.9
		働いていない	68	20.6	8.8	20.6	8.8	8.8	5.9	22.1	13.2	1.5	44.1
	女性	正規雇用	226	24.3	13.7	26.5	18.6	29.6	15.0	32.3	25.2	0.0	16.4
		非正規雇用	208	17.8	17.8	30.3	15.4	18.3	8.2	25.0	13.9	0.5	26.4
		自営業・自由業	20	10.0	10.0	15.0	25.0	35.0	15.0	25.0	15.0	0.0	30.0
		働いていない	123	13.8	22.0	24.4	11.4	21.1	8.1	21.1	11.4	0.0	34.1

※女性の自営業・自由業は参考値に満たないが(n=20)、男性の同項目との比較のため掲載

正規雇用の場合、男女ともに「学習が仕事やキャリアに活かせること」とする割合が最も高い。次いで、正規雇用の男性の場合は「経済的な支援があること」が30.2%、女性の場合は「参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること」29.6%となっている。

問 27 あなたは学校を卒業して以降、仕事以外(家庭や地域活動・社会貢献活動、または自分の趣味や興味、関心など)のためにどのような方法で学びましたか。(いくつでも)

※現在働いていない場合は、今後働くときに必要だと考えることを回答してください。

図表 20-1 仕事以外での学びの方法 [性別・年代]

(%)

		回答者数(n)	1 本やインターネットを利用して	2 テレビやラジオの講座を利用して	3 ウェブ上の学習サービスを利用して	4 通信教育の講座を利用して	5 民間の講座・教室等を利用して	6 大学や各種学校での公開講座を利用して	7 大学・大学院等に入学して(社会人コースを含む)	8 自治体や公共施設が提供する講座・教室を利用して	9 その他	
全体		510	66.5	16.9	28.0	17.1	19.8	9.0	7.3	4.9	1.6	
性別	男性	260	63.8	18.5	33.1	16.9	18.8	12.3	7.7	5.0	2.3	
	女性	250	69.2	15.2	22.8	17.2	20.8	5.6	6.8	4.8	0.8	
年代	男性	20代	73	41.1	21.9	37.0	20.5	20.5	11.0	11.0	2.7	1.4
		30代	69	69.6	21.7	36.2	21.7	18.8	13.0	11.6	5.8	1.4
		40代	66	80.3	15.2	30.3	10.6	13.6	16.7	4.5	6.1	1.5
		50代	52	67.3	13.5	26.9	13.5	23.1	7.7	1.9	5.8	5.8
	女性	20代	68	73.5	14.7	22.1	16.2	14.7	10.3	11.8	2.9	0.0
		30代	69	75.4	8.7	20.3	17.4	14.5	1.4	2.9	2.9	0.0
		40代	54	63.0	18.5	27.8	14.8	20.4	5.6	5.6	3.7	1.9
		50代	59	62.7	20.3	22.0	20.3	35.6	5.1	6.8	10.2	1.7

仕事以外での学び方について全体で見ると、「本やインターネットを利用して」と回答した人の割合が66.5%と最も高く、次いで、「ウェブ上のサービスを利用して」が28.0%、「民間の講座・教室等を利用して」が19.8%と続いている。

全ての年代・性別で、最も割合が高いのが「本やインターネットを利用して」となっている。「民間の講座・教室等を利用して」と回答した人の割合が、男性の50代で23.1%、女性の50代で35.6%と、女性の50代の方が男性の50代より12.5ポイント高い結果となった。

問 28 あなたは学校を卒業して以降、仕事以外(家庭や地域活動・社会貢献活動、または自分の趣味や興味、関心など)のための学習活動をするための主な効果はどのようなものだと思いますか。(3つまで)

図表 21-1 仕事以外の学習活動の効果 [性別・年代]

(%)

		回答者数(n)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			趣味・教養が深まる、関心が広がる	心身の健康につながる	地域への関心が高まる	様々な意見・価値観を知ることができる	日々の暮らしに役立つ	生きがいや余暇の充実につながる	活動を共にする仲間と出会う、つながりができる	自分の活動のお手本となるような人と出会う	地域活動やボランティア等につながる	その他	
全体		510	48.6	26.9	9.0	22.5	31.4	39.8	13.7	10.4	6.5	0.8	
性別	男性	260	44.6	28.8	11.9	23.8	27.3	38.5	14.2	10.8	8.1	1.2	
	女性	250	52.8	24.8	6.0	21.2	35.6	41.2	13.2	10.0	4.8	0.4	
年代	男性	20代	73	28.8	20.5	12.3	21.9	23.3	26.0	15.1	16.4	12.3	1.4
		30代	69	53.6	30.4	13.0	31.9	27.5	49.3	15.9	7.2	8.7	2.9
		40代	66	53.0	33.3	12.1	21.2	33.3	40.9	10.6	10.6	7.6	0.0
		50代	52	44.2	32.7	9.6	19.2	25.0	38.5	15.4	7.7	1.9	0.0
	女性	20代	68	44.1	29.4	8.8	25.0	29.4	38.2	14.7	11.8	2.9	0.0
		30代	69	49.3	30.4	7.2	26.1	37.7	42.0	10.1	8.7	5.8	0.0
		40代	54	63.0	20.4	3.7	14.8	33.3	35.2	14.8	11.1	5.6	1.9
		50代	59	57.6	16.9	3.4	16.9	42.4	49.2	13.6	8.5	5.1	0.0

仕事以外の学習活動の効果について全体で見ると、「趣味・教養が深まる、関心が広がる」と回答した人の割合が48.6%と最も高く、次いで「生きがいや余暇の充実につながる」が39.8%、「日々の暮らしに役立つ」が31.4%と続いている。

全ての年代・性別で、最も割合が高いのが「趣味・教養が深まる、関心が広がる」次いで、「生きがいや余暇の充実につながる」となっている。「日々の暮らしに役立つ」と回答した人の割合は、男性の50代で25.0%、女性の50代で42.4%と、女性の50代の方が男性の50代より17.4ポイント高い結果となった。

問 29 あなたが学校を卒業して以降仕事以外(家庭や地域活動・社会貢献活動、または自分の趣味や興味、関心など)のための学習活動をするために必要と考えることはなんですか。(3つまで)
 ※現在学んでいる場合は、もっと学ぶために主に必要と考えることを回答してください
 ※現在学んでいない場合は、学び始めるために主に必要と考えることを回答してください
 ※現在学生の場合も、学校を卒業して以降のことを想定して回答してください。

図表 22-1 仕事以外の学習活動で必要なこと [性別・年代] (%)

		回答者数(n)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			仕事にかかる負担が少なくなること	家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること	経済的な支援があること	参加しやすい場所で学習する機会や教室等が開催されること	参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること	学習する機会や教室等の情報が得られること	学習することに対して家族の理解が得られること	きっかけがあること	その他	学習活動の必要性を感じていない	
全体		1,200	19.8	12.8	25.5	21.2	23.0	12.5	9.8	30.9	0.4	23.6	
性別	男性	600	24.2	11.5	26.5	20.0	20.8	13.5	11.5	31.2	0.5	22.2	
	女性	600	15.5	14.2	24.5	22.3	25.2	11.5	8.2	30.7	0.3	25.0	
年代	男性	20代	150	21.3	12.0	17.3	21.3	21.3	14.7	16.0	31.3	0.7	17.3
		30代	150	25.3	14.0	30.7	20.7	19.3	14.7	15.3	30.0	0.0	22.7
		40代	150	27.3	16.0	26.7	15.3	18.0	16.0	6.7	31.3	0.7	22.7
		50代	150	22.7	4.0	31.3	22.7	24.7	8.7	8.0	32.0	0.7	26.0
	女性	20代	150	20.7	14.0	20.0	17.3	16.0	11.3	12.0	31.3	0.0	26.7
		30代	150	14.0	18.7	23.3	20.7	22.7	11.3	5.3	31.3	0.0	30.0
		40代	150	12.7	15.3	28.0	24.7	30.0	10.7	7.3	25.3	0.0	24.7
		50代	150	14.7	8.7	26.7	26.7	32.0	12.7	8.0	34.7	1.3	18.7

仕事以外の学習活動に必要なこととして全体でみると、「きっかけがあること」と回答した人の割合が30.9%と最も高く、他項目と比較してどの性別・年代からも回答されている。次いで「経済的な支援があること」が25.5%、「参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること」が23.0%と続いている。

性別・年代別にみると、「仕事にかかる負担が少なくなること」と回答した人の割合は、男性の40代で27.3%、女性の40代で12.7%と、男性の40代の方が女性の40代より14.6ポイント高い結果となった。また、「参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること」と回答した人の割合は、男性の40代で18.0%、女性の40代で30.0%と、女性の40代の方が男性の40代より12.0ポイント高い結果となった。

図表 22-2 仕事以外の学習活動で必要なことと最も小さい子どもの状況 [性別・年代]

(%)

		回答者数 (n)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			仕事にかかる負担が少なくなること	家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること	経済的な支援があること	参加しやすい場所で学習する機会や教室等が開催されること	参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること	学習する機会や教室等の情報が得られること	学習することに対して家族の理解が得られること	きっかけがあること	その他	学習活動の必要性を感じていない	
全体		1,200	19.8	12.8	25.5	21.2	23.0	12.5	9.8	30.9	0.4	23.6	
未子の就学状況	男性	未就学児	58	29.3	32.8	29.3	22.4	20.7	15.5	22.4	25.9	0.0	10.3
		小学生	56	23.2	19.6	32.1	23.2	19.6	25.0	16.1	37.5	0.0	7.1
		中学生	20	30.0	5.0	35.0	25.0	20.0	10.0	10.0	20.0	0.0	25.0
		高校生・高等専門学校生	21	28.6	4.8	33.3	19.0	38.1	14.3	4.8	14.3	0.0	23.8
		短期大学生、専門学校生、大学生・大学院生	13	15.4	23.1	23.1	15.4	23.1	7.7	23.1	15.4	0.0	23.1
		上記以外	25	20.0	4.0	40.0	20.0	12.0	4.0	8.0	44.0	0.0	28.0
	女性	未就学児	81	11.1	30.9	24.7	23.5	24.7	16.0	9.9	27.2	0.0	21.0
		小学生	47	10.6	23.4	14.9	29.8	23.4	4.3	12.8	21.3	0.0	23.4
		中学生	13	23.1	38.5	53.8	23.1	38.5	0.0	23.1	23.1	0.0	0.0
		高校生・高等専門学校生	26	11.5	19.2	30.8	7.7	26.9	3.8	3.8	30.8	0.0	34.6
		短期大学生、専門学校生、大学生・大学院生	26	23.1	11.5	23.1	38.5	42.3	30.8	0.0	30.8	0.0	3.8
		上記以外	57	14.0	10.5	31.6	21.1	29.8	10.5	8.8	35.1	1.8	19.3

最も小さい子どもが未就学児である男女は、「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」と回答する割合が最も高い。

図表 22-3 仕事以外の学習活動で必要なことと就業状況 [性別・年代]

(%)

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
			仕事にかかる負担が少なくなること	家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること	経済的な支援があること	参加しやすい場所で学習する機会や教室等が開催されること	参加しやすい時間帯に学習する機会や教室等が開催されること	学習する機会や教室等の情報が得られること	学習することに対して家族の理解が得られること	きっかけがあること	その他	学習活動の必要性を感じていない	
全体			1,200	19.8	12.8	25.5	21.2	23.0	12.5	9.8	30.9	0.4	23.6
就業状況	男性	正規雇用	368	25.0	13.3	28.5	23.1	23.9	16.0	14.7	29.6	0.5	16.8
		非正規雇用	77	29.9	10.4	24.7	14.3	11.7	11.7	11.7	40.3	0.0	22.1
		自営業・自由業	63	25.4	12.7	27.0	23.8	20.6	12.7	3.2	27.0	0.0	20.6
		上記以外のその他の仕事	4	0.0	25.0	25.0	25.0	25.0	0.0	0.0	25.0	0.0	25.0
		学生	20	30.0	0.0	45.0	5.0	30.0	10.0	10.0	30.0	0.0	25.0
		働いていない	68	11.8	4.4	11.8	10.3	11.8	4.4	2.9	33.8	1.5	51.5
	女性	正規雇用	226	20.4	15.9	25.7	25.2	27.9	12.8	9.7	30.1	0.4	19.5
		非正規雇用	208	13.9	10.6	24.0	18.3	22.1	13.0	7.7	34.6	0.5	26.4
		自営業・自由業	20	10.0	5.0	20.0	30.0	20.0	5.0	0.0	20.0	0.0	30.0
		上記以外のその他の仕事	3	0.0	0.0	66.7	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3
		学生	20	25.0	10.0	25.0	10.0	5.0	10.0	25.0	35.0	0.0	30.0
		働いていない	123	8.9	19.5	22.8	24.4	29.3	8.1	4.9	26.8	0.0	30.9

正規雇用の男女はその他の就業形態に比べて、「学習活動の必要性を感じていない」とする割合が高い。正規雇用と非正規雇用の場合男女ともに最も高い割合は「きっかけがあること」となっている。

問 30 あなたはこれまでに男女共同参画に関して、どのような方法で学びましたか。(いくつでも)

図表 22-1 男女共同参画に関連した学びの方法 [性別・年代]

(%)

		回答者数(人)	1 本やインターネットを利用して	2 テレビやラジオの講座を利用して	3 ウェブ上の学習サービスを利用して	4 通信教育の講座を利用して	5 民間の講座・教室等を利用して	6 大学や各種学校での公開講座を利用して	7 小中学校の授業で	8 高校の授業で	9 大学・大学院の授業で(社会人コースを含む)	10 自治体や公共施設が提供する講座教室を利用して	11 男女共同参画センターが提供する講座・教室を利用して	12 その他	13 覚えていない	14 学んでいない	
全体		1,200	24.3	8.9	8.6	5.3	5.8	7.3	11.9	13.1	5.6	2.9	2.3	0.3	12.4	36.8	
性別	男性	600	28.3	9.5	11.8	6.3	8.3	9.0	11.2	12.2	7.2	4.2	3.3	0.3	10.0	32.3	
	女性	600	20.2	8.3	5.3	4.2	3.3	5.5	12.7	14.0	4.0	1.7	1.2	0.3	14.8	41.2	
年代	男性	20代	150	21.3	6.7	12.0	7.3	16.7	16.7	16.0	21.3	10.0	6.0	4.7	0.0	6.0	20.0
		30代	150	30.0	14.0	13.3	8.0	9.3	10.7	16.7	17.3	10.0	5.3	4.7	0.0	10.7	29.3
		40代	150	31.3	9.3	12.7	6.0	4.0	4.7	6.7	6.7	5.3	1.3	2.7	0.7	10.7	42.0
		50代	150	30.7	8.0	9.3	4.0	3.3	4.0	5.3	3.3	3.3	4.0	1.3	0.7	12.7	38.0
	女性	20代	150	25.3	10.0	7.3	7.3	4.0	7.3	23.3	23.3	6.0	2.7	2.7	0.0	11.3	28.7
		30代	150	18.0	4.0	7.3	4.0	3.3	8.0	18.7	19.3	4.0	0.0	0.0	0.0	16.7	37.3
		40代	150	19.3	8.0	3.3	4.0	3.3	3.3	4.7	5.3	4.0	0.0	0.7	0.0	12.7	48.7
		50代	150	18.0	11.3	3.3	1.3	2.7	3.3	4.0	8.0	2.0	4.0	1.3	1.3	18.7	50.0

男女共同参画に関連して学んだ方法について全体で見ると、「学んでいない」が36.8%と最も高く、次いで「本やインターネットを利用して」が24.3%、「高校の授業で」が13.1%と続いている。

年代別にみると、「高校の授業で」と回答した人の割合が20代で(男性:21.3%、女性:23.3%)と20%を超えているのに対し、50代で(男性:3.3%、女性:8.0%)と、20代の方が50代より、男性で18ポイント、女性で15.3ポイント上回る結果となった。

「小中学校の授業で」、「高校の授業で」とした人を年代で見ると、20代では、30代と比較して、40代、50代では割合が低い。性別で比較すると、女性の方が回答した割合が高い。

図表 22-2 男女共同参画に関連した学びの方法と就業状況 [性別・就業状況]

(%)

		回答者数 (n)	1 本やインターネットを利用して	2 テレビやラジオの講座を利用して	3 ウェブ上の学習サービスを利用して	4 通信教育の講座を利用して	5 民間の講座・教室等を利用して	6 大学や各種学校での公開講座を利用して	7 小中学校の授業で	8 高校の授業で	9 大学・大学院の授業で(社会人コースを含む)	10 自治体や公共施設が提供する講座・教室を利用して	11 男女共同参画センターが提供する講座・教室を利用して	12 その他	13 覚えていない	14 学んでいない
全体		1,200	24.3	8.9	8.6	5.3	5.8	7.3	11.9	13.1	5.6	2.9	2.3	0.3	12.4	36.8
男性	正規雇用	368	31.3	9.2	14.7	7.1	9.2	10.9	12.0	13.0	8.7	4.6	3.3	0.3	8.7	27.4
	非正規雇用	77	28.6	11.7	10.4	6.5	6.5	6.5	13.0	6.5	1.3	1.3	1.3	1.3	13.0	29.9
	自営業・自由業	63	30.2	11.1	11.1	9.5	9.5	7.9	7.9	12.7	7.9	6.3	6.3	0.0	11.1	38.1
	働いていない	68	14.7	5.9	1.5	0.0	2.9	1.5	5.9	5.9	2.9	4.4	2.9	0.0	14.7	55.9
女性	正規雇用	226	24.8	11.5	8.8	5.3	3.5	9.3	14.6	15.9	6.2	2.2	1.8	0.4	14.6	31.9
	非正規雇用	208	19.2	4.8	3.8	2.9	2.9	2.9	12.5	14.9	3.4	1.4	0.5	0.5	13.9	43.8
	自営業・自由業	20	45.0	15.0	0.0	0.0	5.0	10.0	5.0	10.0	5.0	5.0	0.0	0.0	5.0	45.0
	働いていない	123	9.8	8.1	2.4	4.1	4.1	2.4	4.9	5.7	1.6	0.8	0.8	0.0	15.4	58.5

男女共同参画に関する学びとして、「学んでいない」とする正規雇用の男女で見ると男性が27.4%と全体と比較しても割合が低い。一方で正規雇用の女性は31.9%となっており、男女で4.5ポイント差がある。働いていない人は「学んでいない」とする割合が高く、男性で55.9%、女性で58.5%となっている。

Ⅲ 考察

1. 固定的な性別役割分担意識と実態の関係性

男女共同参画社会の実現のためには、固定的な性別役割という価値観を見直すこと、そして家事・育児等の家族内の責任を男女がともに分かち合うことが不可欠である。これらについて今回の調査では、「男性は仕事、女性は家庭を中心にする」という考え方、および、「子どもが生まれたら女性は仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方についての間を設定した。さらにこれに関連し、生育した家族の仕事と家事の分担という実態についても間を設定した。結果は別途示すとおりであるが、注目すべきは次の通りである。

男女共同参画社会基本法が施行された平成 11 (1999) 年から四半世紀経過しても、まだ市民の約 30% が性別による役割分担を肯定している (問 8)。しかも、賛成する若い世代が多い。その理由として、「家事・育児・介護と両立しながら男女ともに働き続けるのは大変だと思う」ことを理由とする人の割合は男性で 3 割、女性で 4 割ある (問 9)。つまり、仕事と家庭の両立負担への現実的対処として性別による役割分担を選択しているともいえる。

子どものころの家族の仕事や家事の分担については、「父親は仕事、母親は家庭を中心にしてきた」人は、共働き家族でも「母親が中心に家事をしていた」とした人は男女ともに約 8 割であった (問 15)。一方で、20 代の男女では、共働き家族でも「家事は父親と母親で分担して行っていた」とする人が他の世代よりも高かった。1990 年代後半に共働き世帯が専業主婦世帯を逆転するなどした社会の変化やそれによる親世代の行動変化が影響しているといえるであろう。

ただし、固定的な性別役割や「女性は子どもが生まれたら仕事を辞め、育児に専念すべきである」という考え方にそれぞれ約 2 割の人が「わからない」としている (問 8、問 13)。このことも、大阪市の男女共同参画のひとつの現状である。社会の変化に伴い価値観が多様化していることもその要因の一つであることが推測される。

今回の調査では、固定的性別役割に関連する変化の傾向と今後の展望を確認し、また、固定的性別役割の意識について学生のころと現在の差を確認することができた。

2. 世代間のジェンダー観の伝達と教育

進路選択では、本人が重視することがらとともに両親や家庭状況の影響も想定される。高校等への進学時の選択理由として、男性は第 1 に進学・就職へ有利であること、第 2 に学校の雰囲気としているのに対し、女性は逆転して、学校の雰囲気を理由の第 1 としている (問 17-a)。また、大学等への進学時については、女性はやりたいことを勉強できること、次に進学・就職の有利さの順であるのに対して、男性は逆転していた (問 17-b)。男性は女性よりも高校でも大学でも進学・就職の有利さを重視していることがわかる。

この点は両親も同様である (問 18-a)。高校等への進学時において、男性の両親は本人以上に進学・就職の有利さを重視している。また、大学等への進学時は、男性の両親は進学・就職の有利さを第 1 とし、女性の両親は本人のやりたいことを第 1 としているなど、男女で異なっていた (問 18-b)。特に、大学等への進学時に進学・就職に有利であることは、男性の両親では 44.6% であるのに対し、女性は

27.5%に留まっている。

そして、進学選択における影響が大きかった人として高い割合を示したのが母親であった（問 19-a、問 19-b）。両親という保護者が影響を与えることは自然であるが、母親の比率が高いことは、家族での時間の使い方、すなわち、家事・育児分担の実態（問 15）を一定程度反映していると思われる。特に、女性の進路選択は男性以上にその母親の影響を受けている。しかも、年代別にみると若年層ほどその傾向が大きい。実に 45%以上が母親の影響を回答している。ただし、就職時の男性の場合は少し異なり、父親の影響は母親とほぼ同じとなっている（問 19-c）。

最終学歴となる学校の選択については 5 割以上が満足し、不満とするのは約 2 割である（問 20）。その不満の理由の第一位は男女ともに「より就職に有利な学校に通いたかった」であった（問 21）。男性の不満の第 2 位は「好きな学校に通いたかった」、第 3 位が「さらに進学したかった」となるのに対し、女性の場合は、「さらに進学したかった」が第 2 位であった。これらの理由の第一位は、男女ともに学力の不足をあげているが、第 2 位は、男女ともに経済力が十分でなかったであり、選んだ男性が 4 人に 1 人であるのに対して、女性は 3 人に 1 人であるという差がみられた（問 22）。

今回の調査では、男女ともに進路選択に際して進路・就職の有利さを重視している傾向を確認できた（問 19）。それと関連して、進路選択に影響する人（こと）という点では、両親とりわけ母親の比率の高さを示す結果であった。そして、前項の固定的な性別役割に影響を与えた人としても母親は男女とも第 1 位であった（問 10）。この両方の結果から、あらためてジェンダー観、進路選択における母親の存在の大きさを、男女共同参画の観点から確認できた。「母親が中心に家事をする家族」で育つことは、ともに過ごす時間が長いために、子どもへの影響は大きい。仕事のため通勤と職場で長時間費やさざるを得ない父親の子どもへの影響は相対的に小さくなる。この実態は固定的な性別役割実態として、子どもの考え方の形成に作用していると思われる。

3. 社会教育の課題

社会教育については、男女ともに仕事のために社会に出てからも学んでいることが明らかとなった。そしてその教育の受け方において、一定の男女差があることが確認できた。それは男性と女性の置かれている状況からの差が生じている結果である。総務省の社会生活基本調査（令和 3 年）によると、男性は女性の約 1.5 倍の仕事関連時間を有する一方、女性は男性の約 4 倍の家事関連時間を費やしている実態がみてとれる。男女間で仕事と生活時間の配分に大きな偏りがあることが、教育の受け方の男女の差異の一因であることが推測できる。全体に社会人になってから学んでいる比率が全体としては 7 割であり、それほど高くないことは課題であるだろう。特に、20 代男性の 8 割以上が学んだとしているが、40 代・50 代女性は 6 割に留まっている。

社会人になってからの学びは男女とも全体の 4 割が仕事のために学んでいる。仕事のために学ぶ理由は、仕事に必要な資格取得が一番多い。そして昇進・昇格の為に学ぶのは女性より男性が多い。逆に転職の為に学ぶのは女性の方が多い。そして学ぶ機会がない人も 4 割存在する。特に男女差がみられるのは、世代別にみたときである。若い世代ほど仕事のためとともに、家庭のために学んでいる比率も高い。さらに学びの手段もインターネット・SNS が最も多くなっていることも社会の変化を映している。社会での学びと教育は、市民の暮らし方の変化とともに、急速に変わりつつあると言える。

そして男女共同参画についての大阪市民の学びの調査結果にも、男女共同参画政策のこれまでの実績

が反映されている。すなわち若年層ほど「学んでいない」は少ない。そして「覚えていない」も少ない。若い世代は、確実に男女共同参画について学び、そして記憶している。さらに若年層ほど小中高校で学んでいるという結果もある。つまり、40代・50代は小中高校で学んでいないということである。実際、本調査でも学んだとした人は男女ともに5%前後であった。そして、最も意外な結果であったのは、男性の方が女性よりも学んでいる比率が全体に高いことであった。特に高いのが本やインターネット経由の学びであった。大学の授業も女性よりも男性の方が割合が高い。男女共同参画センターの講座や教室の利用についても男性の方が多い。

男女共同参画について学校教育で学ぶ機会が確保され、さらに書籍やインターネットを通じて何らかのかたちで学んだ割合は、「覚えていない」を除くと約5割であることを確認できた。ただし、同時に「学んでいない」割合が男性の32.3%、女性の41.2%であることは、男女共同参画センター提供のプログラム利用がきわめて低かったことと合わせて、対処すべき大きな課題の存在を示しているといえるであろう。

IV まとめ

あらためて調査をふりかえるとき、以下の4点の指摘ができる。

1) 本調査では、年代別に調査対象者を割り付け、世代ごとの結果を得た。特に男女共同参画の基本指標である固定的性別役割についての調査結果は、今後の啓発の設計にとって欠かせない世代ごとの状況を示唆している。そのため、制約はあるが時系列の政策効果を推測することができた。つまり今後の啓発や情報発信にあたり、対象とする年齢層をどう設定するかの基礎的な知見を得ることができたといえる。

2) 教育と学習について、男女共同参画の視点からみれば、あらためて固定的性別役割分担意識が大きく影響していることが確認できた。母親の影響の大きさも確認できた。また、教育という経路を通じて世代的に伝承されており、伝承の基盤となっているのが家族の家事分担であると推測できる。母親が就労しているかどうかにかかわらず、全体の8割で「母親が中心に家事をする」子ども時代を経験している。そして、進路選択においても、男女ともに母親の影響が大きい。その意味で、教育における進路選択は、子どもへの母親の影響を排除できない。

3) 社会人の学習活動においても、固定的性別役割分担意識の影響を確認する結果であった。仕事のための学びも仕事以外の学びも、どの性別・年代でも7割を超える人が学習活動の必要性を感じている。そこでの男性と女性の差は、職業上のキャリアコースにも反映している。仕事のために学んだ場合、男性は昇進・昇格を理由に社会に出ても学び、女性は転職を理由に学ぶのである。

仕事のための学びでも仕事以外の学びでも、充実した学習活動のために必要なこととしては、男性からは仕事負担の軽減、女性からは時間的な参加のしやすさが挙げられた。

仕事以外の学習活動では「きっかけがあること」とした人がほとんどの性別・年代で3割を超えた。40代・50代女性の4割が何かを学ぶ機会がなかったとしており、この層へのきっかけづくりは有効であると考えられる。

4) 男女共同参画に関する学びについては、若年層と男性について想定を超えて学びの進展を確認できた。そうであるとするなら、今後、中高年層、さらには、女性を対象とする男女共同参画の啓発が課題として示されたといえる。なによりも、1999年以來の男女共同参画に関する取組が、一定程度成果を示していることが、世代別の調査結果を得ることで確認できたことは、今後の男女共同参画の推進にとっての貴重なステップとなったと言える。